

証の柳川



麻生路郎☆主宰

七月号

no. 422

No. 422

Pensoj flugas trans la land - limon

THE SENRYU ZASSHI

川柳雑誌社 主催

第九回

川柳まつり

7月8日(日) 午後一時



会場 四天王寺本坊(電話七七一〇〇六六番)

大阪市天王寺区元町一七

★会費

百五十円

開会の辞

若本多久志

(参加者全部におみや
打進呈)

★余興

(箕被)

中島生々庵

狂言

麻生路郎

柳話

「空想力について」

小野十三郎

内藤忠治郎
黒田亮三

兼題

「喜び」(三句)

中島生々庵選

★川柳おどり

婦人部有志

「声」(三句)

北川春渠選

「庭」(三句)

清水白柳選

★懇親宴

会費 五百円

「泰・足」(三句)

西尾 望選

席題

三題当日発表(各3句宛)

★特別課題

情熱発表

麻生路郎選

呈賞

★各題天地人・各題天位から落郎選
により不朽洞賞

(回会場において5時
半から7時までの予定
です。早目に受け付けま
でお申し込みください)
★なお場内でのご利用は
係員に遠慮なくご相談
くださいませ。

八月兼願予告

「木」「昔中」「百鬼」

「不意打」

閉会の辞

主井文蝶

大阪市住吉区万代西5-25

川柳雑誌社

電話 大阪(671) 6081番

不朽洞句帖

麻 生 路 郎



自分すら救えぬ人の立候補

宗教宗即政治家の俗の俗

云わしておけば若造が公約す

必勝と書いていたのがおかしくて

理由なき殺人があり世も末か

老人におもちゃなしバラの前に立つ

又遭難か蟻にもひとしき

健保の医者へいお次ぎへいお次ぎ

奥さんを缶詰にして稼ぎに出

数に弱くこれからの世をいとい

川柳雑誌七月号目次

★柳室	一路集「仮病」	入門講座「欠伸」	不朽洞句帖	各地柳壇	金泥集	近作柳柳	同舟近詠	川柳塔	不朽洞の人々	鳴枕を悼む	中万字家・八橋	大万川柳「張消し」発表	句評リレー	★青葉吟行	窓口談義	★現代柳人録	川柳調でうった電報	生きた句で	名句と難句	特集「川柳入門の動機」	不朽洞句帖	老眼鏡をかける	沖繩と川柳	リバイバル・ブーム	軸吟について	野尻弘	麻生路郎	東野大八	服部十九平	北川春渠	直原七面山	七面山・味平・白香・梅志・東岸	阿茶・ひか平・文秋・すゝむ	麻生路郎	酒井ひか平	戸田古方	★川柳書架	麻生路郎	主井堂・八歩・文月・むしな・舟遊	富士野鞍馬	小西雄々	北川春渠	麻生路郎選	諸家	麻生路郎選	北川春渠選	麻生霞乃選	清水白柳	黒川紫香選	那谷光郎選	早川清生選	(46)	(37)	(36)	(34)	(39)	(38)	(42)	(17)	(20)	(11)	(6)	(39)	(41)	(15)	(40)	(26)	(25)	(18)	(16)	(4)	(28)	(3)	(14)	(41)	(12)	(20)
-----	---------	----------	-------	------	-----	------	------	-----	--------	-------	---------	-------------	-------	-------	------	--------	-----------	-------	-------	-------------	-------	---------	-------	-----------	--------	-----	------	------	-------	------	-------	-----------------	---------------	------	-------	------	-------	------	------------------	-------	------	------	-------	----	-------	-------	-------	------	-------	-------	-------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	-----	------	------	------	------	------	------	------	------	-----	------	-----	------	------	------	------

スタミナいっぱい
疲れしらず!

●疲労・二日酔・肌あれ・湿疹
10錠・60錠・120錠・300錠

強力 総合強肝保健剤

チオクタン

フジワ 藤沢薬品



川柳 名句と難句

麻生路郎

「貴様は兵隊はキライか」と云った、ところが、Wはすかさず、「ハイ、キライであります」と臆する色もなく答えたので、「ヨシッ」

と、云うなり、ボンと不合格の判を押したそうである。この検査官の英断と、Wの勇気には、今の世相には見られないものだけに、一寸筆をすべらすことにした。

〔三四一〕

葬式へゆくにカメラをぶらさげ

て (良圭)

カメラマニアをズバリと詠んでいる。葬式と云う、一家にとっては悲哀のどん底にある情景も、カメラマニアにとっては一つの被写体に過ぎないのである。その非情さが「カメラをぶらさげて」となったのだ。

〔三四二〕

暑いからと社長訓示を半分にし

(多久志)

この句を読むと、暑い時分だから、聞く方も辛いだろうというので訓示を半分にしたと云うよりも、社長自身が暑いから、汗を流してまで訓示をするにも及ぶまい。どうせ頭の上を素通りする訓示だからと。訓示を半分にしたと云うのであろう。社長心を巧みにつかんでいる。

〔三四三〕

明治大正は五玉を搾させる (甲吉)

〔三三七〕

あんな子が少年Aとは思われず

(柳志)

近ごろの新聞や週刊誌を見ていると、殺人、暴行、自動車強盗、放火と、大人も及ばぬ不良振りをA少年と云うトク名で掲載されている。人権尊重はまことに結構ではあるが、「あんな子が」と云う上五文字で、法の不備を衝いていると云えるだろう。社会諷刺句として推奨したい。「あんな子が」の措字はいくちほどの鋭どさがあると思う。

〔三三八〕

核実験雀只今恋愛中

(無限)

奇抜な句だ。核実験と雀の恋愛との対照は一寸類のない表現技巧だ。あり得ないことのようにあり得ることもある。そこに詩がある。「只今恋愛中」の措字にはお

えまされる。

〔三三九〕

西成界わい

笑いながら他人が寄って棺を出

し

(満潮)

スラムのドヤ街で、うっかり死のうものなら、

「アイツ寝たそうだ」

と云われて、他人ばかりで出棺してくれ。それも笑いながらである。どん底生活はかくもきびしいものであるのに、この句は日常茶飯事の如くに描写してその真実を伝えている。

〔三四〇〕

故郷の駅に手錠が待っていた

(光郎)

全国指命犯人となった彼が、なつかしいふるりの駅に降り立った。ところがそこに

は手錠が待っていたと云う一篇の哀詩である。ふるさとに残した妻や愛人のもとに、一ト眼会ってから自決したいと云うのが犯人共通の心理らしい。

筆者の知人Wの告白によると、その昔、徴兵忌避で逃げたが長崎で捕えられ、県境まで次ぎ次ぎの警察の刑事に引き渡され、郷里岡山県の県境の駅へ着いた。ところが、そこに立っているのが、小学校時代のクラスメートだった。そして、

「君を迎えに来たよ」と云って、規則だからと手錠をかけたそう。おさな友達だけに、手錠をかける方も、かけられる方もホロリとしたに違いない。

徴兵検査官の前に引き出されたWはすばらしく頑健な青年であった。検査官の大佐が

軽い穿ちの句だ。明治生まれ大正生まれの人たちは皆、五玉のソロバンで育ったので、今どきの四玉は使えない。

「オイ、五玉のソロバンはないか。用度の老人のそこへ行って借りて来い」

と云ったところを「探させる」と詠んだものだろう。

ソロバンは加減乗除を行う簡単な計算器で、古代エジプトに発生し、宋、元の頃に

中国で盛んに行われ、日本には文安年間（十五世紀中葉）に伝来、今日もお盛んに使用されている。現今使われているのは四つ玉で、二十四ケタか二十七ケタのものがある。

〔三四四〕

銭湯で娘やる気はおまへんか

（珠笑）

銭湯と云うものは庶民的なものである。お互いに素ツばだかで、湯槽から首だけ出して談し合えるところに、この句の情景も見られるのである。「おまへんか」は「ありませんか」の大阪弁。

〔三四五〕

あじさいは雨にぬれてる葉玉か

（俊江）

雨に濡れたあじさいを葉玉のようだと比喻した感じの句だ。女性らしい見方である。葉玉（くすだま）と云うのは厄除の飾

具で、句袋に蓬・菖蒲・造花などを結びつけ、五色の糸を長く垂らしたものである。一寸優雅なものだ。端午の節句に簾・柱などにかけて悪鬼や悪疫を払う縁起としたものだそう。

〔三四六〕

B G の日記にいやな課長さん

（曉明）

「君は、八頭身に、もうチョイだね」とか「山本富士子にどッか似てるよ」とか云って、なんだか気のあるようなことをほめかすんだもの、イヤな課長さんだわ！斯うしたB G の日記を見ると果して、イヤな課長さんであるのか、どうか判ったものではないと云うところを、この句はつかんでいる。

〔三四七〕

上等兵の眼に自衛隊なっとらず

（可住）

日本軍閥旺なりし頃の上等兵なんて随分威張ったもんだ。私が解説するまでもなく、戦時映画でイヤほど見られたことであろう。その上等兵の眼から見れば、自衛隊の隊員などは兵隊の赤ん坊ぐらいにしか見えないのであろう。そこを「なっとらず」と評したのである。

〔三四八〕

退職金禿けた頭をなでてみる

停年退職す

（没食子）

停年退職ばかりは、つきあたらずと実感が出ぬものらしい。この句のように、退職金を手にして、はじめて、オレは退職したんでア。そして今更のように、禿げた頭をツルリとなでて見て、しみじみと感懐に耽ったのである。

〔三五二〕

懐具合察して歩きましようと言

う

（素身郎）

停年退職とはそうしたものかも知れないどこまでも衝きあたれば判らぬ味であろう。彼と彼女のデートだと見てもいいだろう。

〔三四九〕

京ことば加茂の流れもゆるくみ

え

（東天紅）

京に遊んだ。四条のあたりを歩いた。フト京ことばに触れた。なんとやわからかうつとりとさされる言葉であらう。加茂川の流れまでが、ゆるくゆるく流れているように思えると云うのである。旅人の感懐を巧みに詠んでいる。

〔三五〇〕

流惑は終り博士は句

に帰り

（一十十）

時間的に長い句だ。流惑の時の医博は洋服を脱いでベッドに横たわるひまもない忙し



結婚式場 長生殿

近代的な設備をととのえた
関西一の結婚式場 貸衣装も
豊富にそろえております ●6階



大阪日本橋
松坂屋
TEL 631-1171

川柳塔

大阪市 市場 没食子

田芹など摘んだ疎開の春思う

二度の務め柳の下に鱗いす

西宮市 若本多久志

人の善意信じてこよい早寝する

核実験されど女は盛装す

近頃の娘さよならで振り向かず

レスリングファンで後家を立て通し

大阪市 正本水客

山の駅夕餉の煙り見て通り

松が枯れてることから話はずみ出し

兵庫県 小西無鬼

メモ代りに使こたお紙幣^{サッ}で釣をとり

五月雨に墨摺る幸の久し振り

骨の出たスネとは子等の未だ知らず

大阪府 西 いわを

飛行機が降りて来そうな水源池

夫とは別な男を頼り切り

大阪市 北川 春 巢

貧乏ゆすり父の真似とは叱られず

慰安会わが社こんな人におり

長生きはできんとおどした医者死に

旧友は一千万円軽く云う

安いのか給食も鯛家も鯛

ワイマル 羽佐間柳葉

責任だけ喋る官選弁護士

外語カクテルオートイレには恐れ入る

堺市 吉田圭井堂

値を聞いて片身にしとく市場籠

水があるだけでも大阪よいところ

あの人がとまた急逝の味気なさ

防府市 長野井蛙

正論を全権孤立無援にし

申訳ないでは仏浮ばれず

岡山県 直原七面山

後添も貰わず社長頑固なり

冷戦の夫婦に小鳥見放され

女中にも公休があり恋進む

牛は使えますかと百姓の見合

母のない子が保母さんを独占し

男は好きよと女将気どらず

ちぐはぐな返事も株が暴落し

身を粉にして尽した夫に浮気さる

おだてられてまた無報酬の役に就き

鳥取県 河村日満

専従になって光蔭矢の如く

母の日の食堂家族連れでこみ

東京へその日帰りの旅ながら

助太刀を女給にさせる流行歌

豊中市 足立春雄

通勤車草花売りに逢うも春

倉敷市 木村千容

花あわれ限界の来た樹と知らず

ニセ札をつかませニタリニタリ春



原文のままとことわり書をされ

音もなく忍びよりけりわが老化

見栄されば銀髪なびく春の風

大阪市 木村 水洞

値の安い金魚ばかり生き残り

遺言状書く程でない暮し向き

大阪市 真鍋 一瓢

腰弁へ雨はやらずの雨じゃない

つけ焼刃の文化よ椅子でおみおつけ

提灯に釣鐘すでに犯されて

大阪市 後藤 梅志

有がとう有がとうと手を握り近きぬ

女房らしさが消え失せた洗濯機

まだまだと敗れたとまだ知らぬなり

せんべいを出され窮屈感がとれ

米子市 小西 雄々

留守中の指図までして妻出掛け

ツイストを踊るほど勉強して呉れず

大阪市 山川 阿茶

核実験看も反対したかろう

出すものをぐずぐずしてて恥をかき

若の花引退

栄枯盛衰只長短があるばかり

大阪市 金井 文秋

ゼスチエアの程は唄まね声が出ず

花生けて妻も平和を愛すのか

加賀市 那谷 光郎

履歴書に賞罰はなし恋もなし

糸仙がまたも落ちそうシームレス

ザルで水汲む生活を伯父に叱られる

下関市 桜川 不水

水溜りを真直ぐに走る兄弟

母の日に兄は妹の助手となり

岡山市 浜田 久米雄

強壮剤の名をこっそりと記しとき

タクシーの泥この辺で待つとする

のんびりと勤めゆっくり昇って

ライターを出しタイミング考える

出雲市 尼 緑之助

姉の死

馳けつけてみれば黄泉へ行くすがた

やっとくれた便り胎児が動きます

大阪市 水谷 竹荘

テレビ料理うちにはそんなに鍋はなし

童心にかえって見せるかくし芸

宗教の踊りをまねて笑わせる

鳥取市 杉谷 湖山

バスがまた落ちてプランが気にかかり

足腰が立つ間と旅をすすめられ

東京都 山根 白星

妻ある日ノラのめざめに似た反旗

激怒もう願いに変る子の家出

今昔の感あり老いし活字工

子を探し当てて女の貌となる

奈良県 飯降 白香

一人住み時計の音までとほけてる

雄弁で知性とやらをひけらかし

隠居所のラジオは浪曲だけをかけ

奈良県 西辻 竹青

町人になってすなおにひげをそり



現職を訪えば何やら偉く見え

呉市 林野 甦光

第二国道唄えばあんた若いのね

修学旅行のように妻が出て行つた

岡山県 福島 鉄児

おぼろ月今宵かぎりの恋になり

緊張が解かれて窓の風を知り

西宮市 若林 草右

四国周遊三句

だんだらの島も背伸びがしたかろう

南国の土佐は田植と鯉のほり

定年のあとは名刺もメモがわり

広島県 山田 季賛

連休を寝ていて腰が痛くなり

社の人事やはり縁故の中が利き

一人旅車窓レンゲへ気をほぐし

看護婦に叱られたのもある斗病記

岡山県 田村 藤波

見合いなんかせないと母をつき放し

心機一転結婚式の其の日から

児島市 本田 恵二朗

安全地帯こも油断のならぬとこ

B Gの退社届は祝われる

京都市 松川 杜的

春夏秋冬おんなじタイで貯めていず

明日は日旺雨戸もきつちり閉めて寝る

ネグリジエの派手に後家さんひとと住む

堺市 高崎 雄声

鈍行もよしと思える齢となり

先ず靴の中を整理したお正月

島根県 藤井 明朗

祭の夜まだ灯は消えず母と娘と

旅終る土産重たく駅に立ち

岡山県 永松 東岸

その日暮しの台所にも冷蔵庫

不渡りをもらった方が阿呆にされ

人間も一緒に会社ごと売られ

病む床の枕元にも雨がもり

倉敷市 野田 素身郎

五月晴挑発するよに女脱ぎ

よその鯉職であやす母子家庭

大阪市 木村 十悟

ニワトリもアパート式に飼われとり

少年と云うには恐い五尺八寸

大阪市 伊達 堰子

税務署に強い女房で逆らえず

ツイストのねじれに診断ミタテなやまされ

大阪市 不二田 一三夫

つつましくつつましく五十の姪婦

浮気するシグナル赤が点いたまま

芦屋市 丸川 初甫

青い山脈の唄が流れる若葉かけ

踏切事故犬でよかった人だから

ブラットへ今日も無事故の水を撒き

唐津市 新潟 回天子

別嬪が隣でチャンと居る私

よしと言えば上戸はそれだけよく分り

岡山県 池田 古心

冗談の言える病気はまだ死ねず

蛭狩り山に蛭は居らぬのに



大阪府 早川 清生

仲居身について店では風邪忘れ

病欠を訪えば肥った妻が出る

入る墓のないさびしさに老妓堪え

堺市 辻 圭水

母の日と云うにもめごと持って来る

米転の噂に出勤早くなり

西宮市 小浜 牧人

見さかもなく腕豆はすがりつき

定期便のごとく暮仇やってくる

我が空白へめじろ囀る

大声に笑ってみだし胸を病み

名古屋市 菱田 満秋

誰のうつ鐘か桜が散りはじめ

やくざっぽい口調で刑事同士なり

社長ほど稼ぐ女に酌をさせ

大阪市 橘高 薫風子

気が付けば恋のかけらを拾うてた

湯槽出る男海より出ることし

奈良市 宮口 笛生

浪人の名前で残る不倖せ

母の居る田甫へ帰って来る園児

八重桜満開重たい姿なり

からからに口が乾いていたイチゴ

大阪市 西川 晃

銭少し溜めて詩魂が涸れている

古本屋何かせつせと書きためる

立飲みの父を待つ子が立読みし

神戸市 仲 どんたく

サンダルで朝会い帯で夜に会い

男なんか男なんてと犬を飼い

血圧がおどおどと飲む小ジョッキ

平田市 久家代 仕男

質草を抱けばほつれ毛忙しくて

仲人の嘆き消防車の役目

ブロンズに染めても鼻が低すぎて

お流れをなど卑屈になる猫背

大阪市 本多 柳志

うちの娘のデモをたしかに見て戻り

ガールフレンドの序でに父の方も撮り

大物と見せ度い漫画持ちあるき

出雲市 原 独仙

もみくちゃんにされても生きん朝を乗る

当らぬも当るも八卦恋捨てず

西宮市 樋口 舟遊

五月雨へ三十ワットの生活なり

また肉にすると魚屋ことわられ

大阪市 魚住 満潮

続・西成界わい 七旬

釜ヶ崎バクダンと云う酒を売り

新世界右も左も西部劇

煙草一本最敬礼をして乞われ

ピストルを黙ってもらう夜の顔

みかん箱の中に戦死の子の位牌

高利貸娘の年も聴いて去に

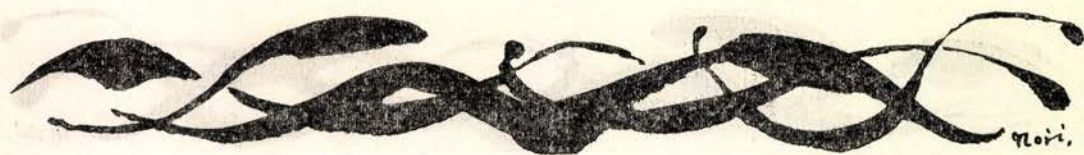
ドヤに寝て国禁の書きまも愛す

愛媛県 村上 旭童

雲を見ている長男の目がきれい

田を少し売って老農意地をすて

神戸市 傍島 静馬



失恋のおんなにしてはよく喰べる

がたのくる頃に下さる文化財

ご先導する駅長の足が浮き

へんくつで仕事の虫で世を終り

改装はしたけど味は元のまま

笠岡市 木山 遠二

一の字に楷行草の別があり

為になる話になると欠伸する

布施市 森下 愛論

不作法な奴やとステテコ叱られる

メニューには時価ばかりなり法善寺

姫路市 植村 客遊子

門札もやっぱり出世する名前

僕の娘でなさそう打算的すぎる

大阪市 河井 庸佑

立場上言うてる事と聞きながす

披露宴すんで二人の顔になり

大阪府 谷 沢 好祐

使う身にならずよかった労基法

田舎出が子にバレエだのピアノだの

リバイバルお江戸は井戸を掘りはじめ

泉大津市 高津 徹也

フィアンセに送る句

云いたげをころし夕桜を見仰ぐ

魅せられる事の寒け覚ゆなり貴女のうなじ

桜目 貴女に拾ってやった夢

愛媛県 榎 紫光

台本は読ませてくれぬエキストラ

一年生もうライバルをこさえて来

ガム噛んで歩くこの娘も戦後の娘

倍増論当てにしたので借りが増え

青森県 工藤 甲吉

風が光り女が光り五月来る

二の腕をちらりと見せて髪を撫で

十円で見送りという義理が済み

松江市 小林 孤呂二

サンドイッチマンやれそうなのもいるメーデー

この汽車も都会にあこがれる人でこみ

靴下を脱げば庶民の疲れなる

松江市 舟木 与根一

和服着たとき美しいお辞儀する

故郷の方向にへんてつもない山

釘一本打つに養子の音がする

豊中市 林 夢虹

リカ子有情 己が裸形に独り見入る

父のない子が早熟な恋をする

西宮市 山本 一傘

キッスする勇気ないまま逢いつづけ

十円で子供に買えるもの多し

大阪市 今 西 生薑

河童子ヘダムが深いと注意する

河童よりより移転補償を協議する

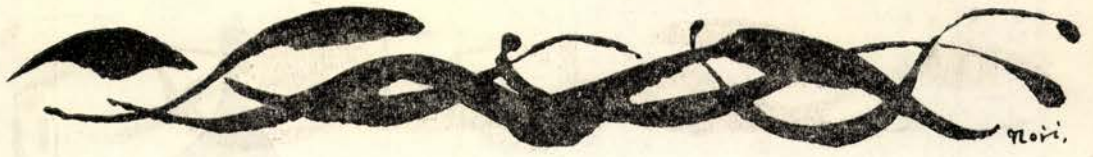
京都府 室井 八九寸

うしろ姿だけでよかった大原女

生垣の門に前衛派の名札

岡山県 横山 一声

球根よ芽を出せ春は来て居るぞ



米転はしたけど山又山の奥

小松市 関戸宗太郎

ポスターにないぬかるみを歩かされ

二次会のバーへBG顔が効き

ふるさとへ左遷どっかり根をおろし

美祿市 安平次弘道

アンテナ林立総理ますます強気なり

善悪より利害で反対する野党

大阪府 高橋尚史

言いこめてやったと思う味気なさ

葬式へ貸切スでかり出され

諫早市 川岡靈眼子

労働でない金魚の泳ぎよう

捨てられた小猫を思う今日の膳

貝塚市 杉本一鶴

ミイラが食事をしてる鏡の中で

試歩の足フトとめて聞く「春の海」

大阪市 本多清人

レジャーブーム妻もこの頃五七五

かばわれる哀しさ定年が迫り来る

ラッシュアワー野党はこれで票を読み

同舟近詠

大阪市 橋本緑雨

経済の動きに重役も異動する

恩給で強がり言うて暮してる

長野県 高峰柳児

こりて居る再婚任せきりとせず

子の辞書を借りてクイズをあきらめず

今治市 長野文庫

結婚後会社へ花を持って来ず

これからと思えどすでに下り坂

末席の正論ボスがふみにじり

和歌山市 秋月宏方

僕の持つ成長株は乳を飲み

チト無理をした新婚のホテル代

うまかった幼き頃の砂糖水

大州市 米沢曉明

みんないい孫というとき敬老会

風を切る燕交通事故もなし

松山市 月原宵明

候文書いていまだに背広着ず

分譲地おもちゃのような家ばかり

新緑の電車吊皮みんな揺れ

再び松山転動

転勤へ新聞記者が待っていた

名古屋市長谷川鮮山

人の下駄までも揃えて出来た人

熟考の相手の方も拭く眼鏡

根性を持てと親方強い語気

長崎県 光武弦太朗

にんげんのうしろ姿はかなしいものだ

がりがりがよってたかって町が出来

生神さまが嫁といざこざ

金策の友をすごすごかえすなり

春なれや思いちがいをしてばかり

リバイバル・ブーム



北川 春 巢

「学会でネ」

と敷も箱も忙しそうに、得意そうにいう。その癖、驚天動地の学説を発表したという声は聴いたことがない。公費で旅行することだけは間違いないが、この句のように敷医者は敷医者同士で大いに飲んで、小唄の一つも発表して来るのがオチであろう。お医者さんに叱られそうな句であるが、ワシは敷医者であるが名乗って出るような人は先ずあるまい」

(「新川柳鑑賞」から)

と路郎先生が

医学会敷医者同士のむ話

(ゆずる)

の句を、名鑑賞しておられますが、実はある月の句会に柳話を命ぜられました時、「学会へ行きますので……」とお断りしたのですが、路郎先生もこの句を思い出して、内心苦笑しておったのであります。

所で、最近の医学会と申します

のは、大きなホールに(今年の内科学会は、東京の厚生年金会館で行なわれました)何千人もの人が集まりまして、スライドを使って講演するのですから暗くしてあります。昔、自分の研究を発表します頃は、その発表さえてしまえば、後は割合気楽に観光にも廻ったのでありますが、現在ではいやしくも公費で来ているのですし、耳新しいことばかりでありますから、席をはずすわけに参りません。朝九時から夕方五時過ぎまで、その暗い中に座り続けろおねばなりません。平素はしつづぬ

講演をするものですから、夜はもうすっかりくたびれてしまふからなるのであります。なるほど路郎先生のいわれるように、驚天動地の発見はないかも知れませんが、新しい機械や方法での研究ですから、日本ではじめての発見いや世界での発見という様なものもかなりあるのであります。婦人科しましてからはそれらのことをまたテキストブックについて読まね

ばなりません。

近頃は成人病―つまり癌だとか動脈硬化・高血圧・糖尿病など―ということが盛んにいわれておりますが、これらは昔学生時代にはあまりやかましくいわれていなかったことで、今では新しい教科書を一から読み直さなければならぬ状態であります。また昔は、勉強の合間に川柳を読むのは、頭のレクリエーションだと自分でも思っていた、人にもすすめておりましたが、近頃は年のせいかこの頭の転換というところがうまく参りません。丁度ラジオの学術講演の直後、熊さん八さんの出る落語がどうもへんに思えて仕方がありませんように、教科書の勉強の後に川柳を考えることがむずかしくなってきたのであります。そんなわけで、学会の前夜にはどうも川柳がでにくい、川柳が考えにくいのであります。従って今夜の柳話も、まとまりのつかないものになるかも知れませんが、お許し願いたいと思います。

二

余談が長くなりましたが、テーマに挙げましたリバイバル・ブームについて申し上げます。

先ず「ブーム」という言葉であります。字引を見ますと「にわか景気・人気」というように出ております。近頃はこれの「ブーム流行り」でありまして、やれ「自動車ブーム」だのやれ「株式ブーム」だの「結婚ブーム」や「ベビブーム」まで何でもブームであります。「レジャーブーム」もその一つですが「レジャー」といいますのは「ひま・余暇」という意味で、新聞語辞典(朝日新聞社刊六一年版)には

「戦後、技術革新にともなうて各国とも労働時間が減る傾向にあり、余暇を善用することが家庭の電化が進むにつれ、ここ数年の生活の向上も手伝って余暇にはハイキング・つり・ドライブ・旅行・ヨット・ゴルフなどを、それも家族づれで楽しむことが流行しだした。」と出ており、六〇年版にはこの語は出ておりません。

四年前、仙台で内科学会がありました際に「レジャー・センター」で懇親会が行なわれました。講演会はそのから離れた公会堂でありましたので、私はレジャー・センターへは行きませんでした。が、丁度大阪市立の体育館に似た建物で、市民がスポーツや音楽に親しんだり、健康の保持や知識の向上を計ろうという目的で建てられたものである。と案内書に載っておりまして、屋内競技場にもな

り、講演会や音楽会も催されるそう、学会の懇親会場にもなつて「さんさ時雨」の歌や踊りも行なわれたのであります。その頃はまだ「レジャー」という言葉は耳新しい言葉でしたし、私にはその真意がよく分つていなかったものであります。「レジャー・ブーム」を詠んだ川柳には次のようなのがあります。右の「レジャー」の意味を頭にいれておくと、句の意味が一層よく分ると思います。

レジャー・ブームお墓の掃除はつとかれ たいお
レジャー・レジャーとうちの母ちゃんまでアジリ 柳児
レジャー・ブーム春を月賦で身をかため 牧人
レジャー・ブーム哲学書をひもとかん 蛙眠子

三

次は本題の「リバイバル・ブーム」ですが、これは新聞語辞典(六一年版)には次のように書いてあります。六〇年版にはこの言葉もまだ載っておりませんので、これも新しい流行語だということに分ります。

「リバイバル。再生、復活、古い劇の再上演などの意。このごろラジオやテレビで古い歌を新しく編曲したものや流行したり、漢方薬が見直されて、それが盛んに使われているように、いったんすたれたものが再び流行することをいう。その歌をリバイバルソングと呼んでいる。」
「そういえば、私の学生時代に流行した「君恋し」が昨年また流行して年末にはレコード大賞を得ております。歌だけでなく映画でも」



老眼鏡をかける

・東野大八・

トでつまんだような鼻、切開手術をしたような口、粘土に黒豆を押し込んだような眼玉、しかもその顔にひっかかっているのが、ガラス玉に針金を巻いたような安っぽいメガネである。

ある日、外国の童話本を読んでいると、この婆さんとうり二つの人物が、夜半に黒い森からホウキにまたがってとび出すのに出会った。(あいつだナ)とたちどころに先生を思い起して寒気がした。

「よし、おれが大きくなったらゼツタイあんなお婆さんみたいなのはヨメにもらわないぞ」

そう誓ったこども心の潜在意識がどうやら針金のメガネで象徴されてしまったらしい。

いまの、うちの奥さんは、こういうほくの気持を心得ている点を見ると、そのかみ、メガネをかけない女性がほくの理想の奥さん—といったことを、小耳にはさんでいたものらしい。

その話だが何年前かのある日、珍らしく二人そろって映画に出かけた。しばらくして場をみるとよその奥さんとうちのとが入れかわっている。変だナ、と顔をもとに戻してのち、もう一度じっくりたしかめにかかったらまぎれもなくうちのカーちゃんだった。そのギョッとした顔を相手が悟ったのだらう、あとでもう一度うかがって見たらずにメガネのないもとの

うちのカーちゃんでスクリーンをみていた。爾今ほくは、二度とその眼鏡をかけたうちの女房をみかけない。(いまもって……)

ところで昨年某日のこと

「なによ、そっくりかえって、メガネをかけなさい、メガネ!」と家内にきめつけられた。ひろげた新聞の中に顔を向けたまま

「メガネといえは老眼鏡か」

「あたり前よ、新聞に双眼鏡をかけるばかはいませんよ」

それから数日後、うむをいわせずほくはメガネ屋へと連れ込まれた

「どう具合は……」

「字の裏側までみえる」

「それごろんなさいよ」

「眼帯をここにかけろと耳があり、つて句があるがね、神サマはエライよ。そこまで考えとかれたんだからね。一つだけじゃない、しかも二つそろえてだ」

このいい方にほくがごきげんなのを知って家内もまんざらでない顔をしてほくの顔を正面に据えて

「イカスわよ」

とニコニコした。三人のこどもたちは、生まれてはじめて眺めるメガネ持ちの親爺の顔に對しもちろんな大きな興味を抱いたよう、少しげしげとみつめて

「よく似合うわ、顔が長いからネ」

「童顔の伴淳みたい」

は次女。

「メガネの上からわたしをみないでネ」

とはさすがに長女らしい言い方。メガネはツルだけで万に近いしろものまであるのには仰天した。結局ほくの方はビニール製の一番安いタマつき五百円で済ました。

しかし、そのつるは茶色で、眼玉の部分の下半分は透明なやつ。

「いまは色あせたが、そのかみロマンスグレイになると快き言葉が流行してたころ、風彩のいいご連中がこれに似た眼鏡をかけ、若い娘さんと楽しくデートしているところを實際にも眺め、また映画のスクリーンでもよくお眼にかかった。今となつては身ビイキではないが老眼のレンズの中にある眼ざしというものは、総じてものやわらかなものである。そのかみほくが「インテリというやわらかな眼と出会い」と句を作ったことがあるが、このときの素材も老眼鏡によるものだ。

とにかくかけたこともないメガネを顔にくっつけると、鼻の台がくすぐたい。しかし便利なことは便利だが、これまで通りいつてもどこでも眼がきかず「メガネメガネ」と時によつては一騒ぎなのはわねながら浅間しい。

と顔に眼鏡を二つも重ねて本をとり出したりしている人がよくいるが、この二丁拳銃みたいに老眼サックが開くとき、人間真理の探求に青年老い易くーの感慨にうたれる。もつともそれがエロ本であっても、見た眼にはそう感じられるのも老眼初年兵のほくの初々しさであるかもしれない。

「お気の毒に、さぞ厄介なことだらう」

ココロ
便 箋

とにかく路郎先生の
元旦だせめて眼鏡を拭きませう

の句がしみじみと名句だなあ、と感ずるようになった昨今のほくである。



中万字屋・八橋

(なかまんじや・やつはし)

富士野鞍馬

江戸吉原で起った大事件のうち、享保の頃、中万字屋の八橋が、佐野治郎左衛門に斬られ、ほかに死者三十八人、重軽傷九十余人という騒ぎは、吉原はじまって以来のことであった。それが芝居にもよく演じられている。

下野の国佐野に、治郎左衛門という炭問屋の金持があった。抱瘡をわずらってひどい醜男であったためか、三十才に近いのに独身で居た。享保八年(一七二三)の春、商用のため江戸へ上り、吉原見物に出かけ、中万字屋の遊女八橋の道中姿を見て、フラフラとなり、それから通い続けた。

治郎左衛門炭の仕切りを使い込み (万明三) などと川柳にも詠まれていた。

それから数年間、江戸に出ては、八橋のもとへ通いつめたのだから、よい身代でもたまらない。借金もおびただし、数年のうちに屋敷、田畑まですっかり蕩尽してしまつた。

首ったけ佐野治かはまる杜若

(万明五)

「杜若」(かきつばた) は、三河の名所八橋の縁語で、治郎左衛門は、敵娼八橋の名に因んで、杜若(とじゃく)と号していた。

落ちぶれてもなお江戸へ出て、吉原へやってくるのであったが、八橋はもう逢おうともしなかった。治郎左衛門は狂気のようになり、中の町に待ち伏せして、八橋が茶屋へ行くのをつかまえた。そしていろいろうらみを話しかけたが、八橋は一言の返答もせず

に、中の町の茶屋、葛屋佐次右衛門方へ入ってしまった。治郎左衛門は、その後を追って葛屋へ飛びこみ、八橋が二階へあがろうとする所を腰車に切った。腰から上は階子に両手をしがみ付いて切りはなされ、腰から下は庭へ落ちたといわれている。幼少の頃から剣術の稽古をして、商人であったが相当の腕前で、その差料も、備前国光の作「籠釣瓶」と名づけられた銘刀だったので、この芝居を「籠釣瓶」と題されているのである。

かきつばたむく折ったは治郎左衛門 (万天六) 大騒ぎ橋を八つに切り落し (管四)

「かきつばた」

は八橋を利かせている

治郎左衛門離のやうなを切倒し (タル一六)

「治郎左衛門離」というのは、立圓と号した人の作の離人形で、後にはあまり用いられなかった。

ここにでもお出でなさいと次郎左衛門 (タル二七) 次郎左衛門娘の御所に居候 (七九)

等と詠まれているが、これは離人形で、人物ではないのである。

百姓の人を切ったは治郎左衛門 (万天三) これはまた、百姓にされている。遣手をはばらしはぐった治郎左衛門 (タル五) 狂い狂って、八橋の外百人以上も切ったのであるから、その中にはヤリテもあつたかも知れないが、「ばらしはぐった」と作られてもいる。なにしろ、剣術の心得はあり、刀は業物、荒れに荒れて、二階から屋根へ逃げた。吉原はじまって以来の大騒ぎとなつて、とうとう大門を閉めたのである。

杜若でも大門を一度打ち (貌)

素手で来て大門を打つ治郎左衛門 (傍四) 治郎左衛門きなかも出さず門を打ち (万天二)

吉原の大門を、引け四ツ (午後十二時) 前に閉めるのは、廓全部を買切った時だけで、千両を要し、これを実行したのは、有名な紀伊国屋文左衛門ただ一人といわれている。それに、一文も出さずに、治郎左衛門は、この騒ぎを起して大門を閉めさせたということになる。それで「素手で来て」であり、「きなか」とは半文のことである。大門をしめたは治郎左文左也

と、この二人が大門を閉めさせたというにもなる。廓中の若い者は、さすまたや棒などを持って屋根へ上り、刀をたたき落して捕えようとしたが、なかなか近寄れない。

治郎左衛門捕手は猫の糞を踏み (拾六)

また捕手も来たかも知れない。屋根上には、現今でも猫の糞がよくある。

治郎左衛門縄を上げぬばかりなり (万明八)

屋根上で仁王立ちになった治郎左衛門は、火事場の纏持ちのようだったろうと、川柳は想像している。

そこで、屋上の天水桶の水を屋根瓦の上へ撒いたので、治郎左衛門は、それに足をすべらして墜ち、ついに捕えられた。

四五軒に付き替えさせる治郎左衛門 (万明四)

あとで、その騒ぎの家では、屋根瓦を葺きかえたであろうと川柳はうがっている。

そして治郎左衛門は、享保十六年(一七三一)三月死刑になったといわれている。三十五才ぐらいと推定できるが、八橋の齢はわからない。しかし二十七才前であつたであらう。

川柳調でうった電報



— 修学旅行から —

戸田古方

「一筆啓上火の要心おせん泣かすな馬肥やせ」とは最も短かくても最も要を尽した手紙の見本のように昔からいわれている名文であります。

五月廿九日から六月五日まで修学旅行について九州を一周して来ましたが、毎日学校へうつ電報にいささか川柳の心得を生かすことができたように思えますので。

第一日は瀬戸内海を船で別府へ「マンテンノホシニナツテベツプガミエハジメ」

早朝に大阪天保山を発ち、午後、四国の今治沖にくるまで、船のように重たい雲がたれ下っていました。来島海峡を過ぎる頃から青空になって来て、翌日からの旅の希望がふくらみます。

「ミンナブジ」とか「オミオクリヨシヤス」とかいろいろのが平凡で常識なのですが、「マンテンノホシ」と快活に晴れあがった心を伝えようとしてみました。「マンテンノホシ」のデニオハ「ノ」は

とって
「マンテンノホシニナツテベツプガミエハジメ」
とした方が締ってくるようにおもえます。

第二日は阿蘇登山でした。まあ好天気には恵まれました。
「アソハソヨカゼマレナハレミナゲンキ」

はじめは
「アソハハレアソハソヨカゼマレナハレ」としていたのですが、もういいかげんに「ミナゲンキ」がでてもと思つて、つけてみました。「ミナゲンキ」を上五へまわして、

「ミナゲンキアソハソヨカゼマレナハレ」

とした方がよくはなかったかとも思います。「アソハソヨカゼ」は度々この山頂に立ちましたがいつも強い風が吹いていたのに、この日はかりはまるで風らしいものさえ感じませんでしたので。

第三日。きれいな入日に暮れ、

きれいな朝日に明けた阿蘇の宿を發つて、東行、日向路を南下、青島、宮崎まで行きました。
「アオシマニキレイナイリヒミナゲンキ」

旅に出ると天気のことやたら気にかかりますが、まして三百五十人から連れておりますとなおさらです。しかも、この日の走行距離は二百五十キロ。七日間のバス

旅行中の最大の山場でした。落伍者が出はしないかとそればかり心配していましたが、幸い無事、宮崎の宿に入つてホッとしました。

高千穂峡だの、青島の近くに

あるコドモノクニだの電文に入れたいものはきりがありませんので、皆没にして、その日の最後の

一瞬を強調したのでした。

「ヒノクニノイリヒモコラモツツガナク」と最初にかいてみたのですが「ヒノクニ」より具体的に「アオシマ」を選び、「ツツガナク」より、第二日のくりかえしながら「ミナゲンキ」をも一度つか

いました。しかしこの「ミナゲンキ」は私にとっては本番の「ミナゲンキ」のつもりです。

第四日。引続き好天。霧島火山群へ入ってゆき、南に下つて桜島の磐岩原を通り、さらに薩摩半島の先に近い指宿まで行きました。

「ミナタノシジャングルプロモウガンモ」

毎日毎日もうたくさんで忙しいことです。もっとゆつくりしたらと思うのですが、あまりエネルギーを余らすのも考えものですし、折角の機会をと最小費用で最大効果を得らつて、こうした旅行特有の強行軍の連続、スケジュールはビッシリつまっています。予め旅行社に依頼し、添米員というその道のベテランで若い元気なのが三人ついていて万事の世話をしてくれるのですが、色々予定通り行かない点も出て来て、プランよりおくれ勝ちでしたが、それでも幸い一人の病人も、事故者も出ず無事に旅を終ることが出来ました。

芯がつかれていたのでしよう。最後、佐世保から夜行列車に乗ると、珍らしく長い間グッすり寝てしまいました。

それはさて、この第四日目も、前日の第三日目におとらない走行距離、二百キロを突破しています。指宿の宿はデラックスなもので、名物にジャングル風呂という

のがあって数千坪のグラスステージの中に珍らしい熱帯植物が群生し、その間に二十八種類の趣向をこらした温泉があるのです。一般は混浴なのですが、時間を限って生徒達に開放してくれました。ずいぶん彼女たちには気に入った様でした。

この日は阿蘇の草山とくらべて原始林でおおわれた霧島火山群の美しさに見えたり、桜島のはてしない磐岩原に自然の驚異を感じたり、しかもこの日も絶好の日向ときています。どれもこれも電文にするわけにゆきませんので、「ミナタノシジャングルプロモウガンモ」

としたのでした。それでも、「ジャングルプロ」がわかってもらえなかったか「ヨクガン」だけで桜島へいったことなどが承知してもらえなかだ気にながら発信しました。

第五日。薩摩半島の最南端、長崎鼻というのや、そこに聳える開聞岳の山裾をめぐる、鹿児島市内へ出ました。天気はおちて泣きそうな空模様になってきました。その中で、どこへいっても西郷さんムードがつくられてゆきました。

そして、熊本県境に近い阿久根で泊った夜には「オイドンノフルサトクマナクミテカエリ」といたしました。もう五日目とも

なりますと、ほかの先生たちも大分川柳的になっていて、

「オイドン」でいこうといいだしたのも私ではありませんでした。それどころか

「オイドンニカングキスルノハキヨウシダケ」

と穿ちでいこうというインスタンと川柳家もできましたが、来年から鹿児島見物が取止めになってはと、折角の川柳眼も没にしてしまいましたが、生徒だって「カンゲキ」しなかったわけではなく、「カンゲキスルノハキヨウシダケ」ではと没になったのでした。

第六日。第六夜は雲仙ですが、阿久根から、関西の学校ではあまり行かない天草で数時間すししました。ほんの端くれだけを見たのでしたがしみつくようにキリシタンの臭いがします。しかも、小雨にぬれながら。

「キリシタンノイセキキヨメノアメノナカ」

島原半島へ上ると天気も回復しましたのでほんとに「キヨメノアメ」の中でした。「ナミダアメ」とかいろいろ考えたのですが、「キヨメノアメ」でおちつきました。

第七夜は大阪へかえる夜行で、雲仙、長崎、西海国立公園をみて佐世保から乗りました。

佐世保はかつての海軍さんの町、西海国立公園は対馬海峡につ

づいています。そこで日本海大海戦が戦われましたが、その戦のはじめうたれた電文の中に

「ホンジツテンキセイロウナレドモナミタカシ」

文人秋山参謀の加筆とかきいていますが、「デンキセイロウ」で霧の多い対馬海峡のその日は見透しのきくこと、「ナミタカシ」で大砲で水線下を砲撃して十分敵艦を沈められると、東京の大本営では確信したときいています。佐世保の町を通りながら、ひとりであれしくなりました。

そして

「ゼンコウテイヲブジニオエイチドウゲンキニキトニツク」

とはじめて川柳抜き電文をうちました。

一九六二・六七

金泥集

麻生蔑乃選

「皮」

鰐皮のガマ口の中ちと淋し 阿茶
敗戦を忘れミンクのチンチラの 同
傷痕へ情の皮膚が移植され 同
ゴミ箱も五月の色の豆の皮 きさ子
南京豆の皮を散らかしく嘸り 同
下手くそに剥かれリンゴもまぶく見え 同
百グラム買うのに大きい竹の皮 清子
皮きりにどうぞとマイク殺生な 同
ゴミ箱を豌豆の皮が場所を占め 同

竹の皮ためて女のつつましく 小石
底皮もちびて暮しにつかれはて 同
蛇の皮入れた財布がふくらまず あいき
電車賃残して買った皮財布 同
キュキュと皮が鳴いてる父の靴 美喜
殺されてまだ皮となり酷使され 同
箱をむいて値段に二度あきれ 好女
皮バッグ腐っても鯛のようにきげ 同
オーバーはミンク本場の愛知らず 酔夢
わにの皮女虚勢を張って持ち 同

次回「事実」 八切七月末日

現代柳人録

- (149) 石川 真砂
- (一) 姓名 (二) 雅号 (三) 別号
(四) 現住所 (五) 生年月日 (六) 出生地 (七) 職業 (八) 電話 (九) 自筆の句一句 (一〇) 川柳以外の趣味 (一一) 配偶者の有無 (一二) 川柳に手を染めた年月
- (一) 石川金松 (二) 真砂 (三) 五七 (五) 明治三十八年一月二十日 (六) 茨城県北茨城市平瀧町 (七) 甘味喫茶 (八) 「887」一六四三 (九) 下戸淋し鳴けない虫に似て 淋し (一〇) — (一一) 有 (一二) 昭和二年
- (150) 野村 圭佑
- (一) 野村利雄 (二) 圭佑 (三) 紺屋町二七 (五) 明治四十二年六月二十三日 (六) 東京都千代田区神田東紺屋町二七 (七) 絵具類和物商 (八) 神田「251」八二〇四・八二〇五 (九) どう感じようとも石が置いてある (一〇) — (一一) 有 (一二) 昭和五年頃
- (151) 神田 仙之助
- (一) 前田 原 (二) 神田仙之助 (三) — (四) 東京都北区稻付町四の五六四 (五) 大正四年七月三十日 (六) 東京都台東区浅草 (七) 東京都教育庁職員 (八) — (九) 信用をされて淋しく自制する (一〇) 音楽鑑賞 (一一) 有 (一二) 昭和六年頃
- (152) 福田 丁路
- (一) 福田貞次 (二) 丁路 (三) (四) 高槻市水室六九二の四 (五) 明治三十八年六月二十七日 (六) 現住所と同じ (七) 公務員 (八) 高槻一四二〇 (九) パンクして呑ん気な人に取りまかれ (一〇) 旅行・演劇・草花園芸 (一一) 有 (一二) 昭和七年頃
- (153) 飯降 白香
- (一) 飯降梅子 (二) 白香 (三) (四) 奈良県宇陀郡室生村向洲 (五) 明治四十四年三月十五日 (六) 大阪府東区谷町二丁目四一 (七) 教官 (八) — (九) 知性などふみにじられて村にすみ (一〇) 謡曲・茶・華道 (一一) なし (一二) 昭和二十年八月



ガガーリン氏(上)とイワノブナ夫人(下)のサイン

窓口談義

麻生路郎

は日本の一川柳人だから、握手の機会に恵まれようなどとは夢にも思わなかったが、言葉も通じない人と、心から、よくいらっしやいましたと云う意味の握手をして、地球が急に小さくなったように感じた。

ホテルでの歓迎レセプションがすんでから、扇町公園のプールへ車を飛ばした。ここでガガーリン少佐の歓迎関西大集會が催され、二万余人の人たちがプールの場内を埋めた。

ここでも私は正面特別席の主賓側十数名と並んで、歓迎側十数人の椅子の一つが与えられたので、親しくガガーリンの一挙手一投足に接することが出来た。

この空の英雄を迎えた情景の凄まじさは既に新聞紙上で読まれたことと思われ、たゞ主賓席に花束が山と積まれたと云えばそれで充分であろう。

続々と集った歓迎の人たちを警戒に当った機動隊のポリスマンの一人が、こんなにも共産党の人たちがあるものかと驚いていたそうだが、それは見当外れで、多くの

学生を交じえたこれ等の歓迎の人々は空の英雄を、国境を越え、人種を問題外にして迎えたのに外ならなかったのである。私もその一人であるから、その蒙を啓いておきたい。

私が、ガガーリン氏に特に敬意を表するのは、はじめて地球の外に出て地球を見て、地球は青かったと云った一言に外ならない。

この言葉の新鮮さは、川柳する人たちにとっても特に重要さを思わせられた。川柳人は常に何人よりも先んじて内容形式に於いて、表現技巧に於いて——川柳的新らしさを発見するよう義務づけられていくからである。

私は又思う。ガガーリン氏は地球を外から眺めて、地球は青かったと云ったが、第二のガガーリン氏は地球を同じく外から眺めて、地球は黄色だと云うかも知れない、第三のガガーリン氏は地球は赤かったと云うかも知れないと云うことである。

昔、漱石が何かに書いていた。或る人が和歌浦は波静かなところであると云ったところが、イヤ和歌の浦は浪の荒らうところだと云った人があった。それは波の静かな時に行った人には和歌の浦は波

續

川柳書架

(21)

わだち

梶元紋太作品集

★本書は梶元紋太氏の評論隨筆作品集である。

★第一部は評論、第二部は作品、第三部は隨筆を掲げてある。

★昭和二十七年三月一日発行。B 6版三三一頁。定価二百八十円

行所、神戸市長田区五位池町一ノ一〇 ふあうすと川柳社。

★著者は有名作家でふあうすと川柳社を主宰。

川柳漫画全集

第二卷

寸鉄双紙 明和の巻

★本書は明和の川柳を左記の漫画家が筆を揮ったもの。

田中比左良、前川千帆、水島爾保布、宮尾しげを、清水対岳坊、代田収一、池部鈞、池田水一治、服

部亮英、細木原青起。

★昭和五年十月十八日発行。B 6版三三〇頁。発行所、東京都麴町区下六番町一〇 平凡社。

★読んで観て興味のある書。

句集

松籟

★本書は桑湾川柳吟社の自選句集である。上野鈍突氏の序。

★一九五八年七月一日発行。B 6版九六頁。非売品。

★発行人、三上茶里。

句集

梅が香

★本書は桑湾川柳吟社の自選第二句集である。上野鈍突氏の序。

★一九六一年七月十日発行。B 6版七五頁。非売品。

★発行人三上茶里。

★

川柳で交通事故防止運動

生きた句で

酒井ひか平

川維篠山支部では川柳で交通事故を守る大運動を起し、マイクで

の静かなところであり、浪の荒いときに行った人には和歌の浦は浪の荒いところなのだ。何れも真に違いないが、その両方である場合のあることに気づかないではないかと云うような主張をされていたように覚えているが、ガガーリン氏が地球は青かったと云う新しい発見も、環境により、又科学の進歩により、更に第二、第三の異説の出ることも予測しなければならぬのだ。そしてそれ等の何れもが真実だと云うことも和歌の浦の例にならば云えないこともなからう。

ソ連作家と懇談

六月九日にソ連の作家観光団二十一人が来阪した。その歓迎懇談会が大坂府厚生会館で催された。その時私は、一人のコメディ

作家D氏をとりえて、私の柳歴の紹介や短詩文学型（詩・短歌・俳句・川柳）の解説をしたあとで、ユーモアな話を聞かせるために、私のうちに飼っている猫の話をした。私は先日、お国のガ



ソ連コメディ作家D氏と麻生路郎の対談 (右)は大坂日ソの中条氏(通訳)

ガーリンさんに会ったと云ったところ、D氏はガーリン氏とは知人だとのことだった。そこで、そのガーリンさんが、一年前に宇宙飛行で成功された時に、たまたま私の川柳の門下の一瓢クンから小猫を買った。そしてガーリンさんが空を征服された記念に、猫にガーリンと命名し、愛称をガーチャンとよん

だ。その後、ガーチャンは毛並がよく、丸丸と太った。ところが空の英雄ガガーリンさんが、五月の廿一日に羽田空港着で来日された日から行方不明となった。少し前から恋をしていたので彼女のもとにはいったのか、それ

とも猫捕りに殺されたのではないかと家中の者が案じて探したが判らなかった。この話をガガーリンさんが来阪された時に話そうかと思つたが、ガガーリンさんは歓迎されるのに、とても忙しかつたので話す機会がなかった。ところがガガーリンさんが五月廿九日の朝、羽田から離日された夕刻に、うちのガーチャンが九日振りにヒョコリと帰宅したのである。何んだが因縁話見たような変な話だがとD氏に話しておいた。それから、ガーチャンをもらう前の猫は「ニャン北」とよんでいたこと、これはシャレの話好きな食満南北の句碑が堺の南宗寺境内に建つた日に、一瓢クンがもつて来てくれたので南北をシャレでニャン北と命名した。南北も川柳家であつたこと、本職は劇作者であつたが数年前に亡くなったことを話したら、NanbokuKemaに就ては更に研究しようと言つて書き留めていた。日本人は猫や犬が好きかとD氏は聞いた。それは日本へ来て一足も猫や犬を見ないための質問だった。歓迎も、名所や会合だけでなく、家庭へ連れて来て、日本の家庭生活を見せることにすればどんなにかよろこばれるのではなからうか。ガガーリン氏などは日本に九日も滞在していたながら、何も見るヒマがなかったらしい。

ボスターで大衆に呼びかけ、その運動の熱心さに多大の反響を呼び連日感謝感激の言葉を頂いている。

此の運動の発案者は同支部会員大木枝葉氏によるもので、同氏は発案以来、連日連夜公務多忙の寸暇を割いて、ボスター書き、ボスター添付と大童の活躍をされ、私等支部会員の助力を得て、添付ボスター四百枚に及ぶ大運動を起こされている。

花の四月には交通安全川柳をマイクに乗せ折柄の花見気分を大いにいましめられ、各方面に多大の感銘を与えられた。

以後も引き続き会員共々この運動を拡張中で、今年度一千枚ボスター添付をモットーに一同張りきっています。何卒御支援の程を、なお他の川柳雑誌社支部に於ても、このような計画をされん事を祈ります。

交通安全川柳

成田さん信じ法規もよく守り

ひか平

おばあさん自分の母と思つてよ

同

知らぬ間に制限越えたアスファルト

寿栄

帰んでから飲んでや折と二合

びん
みのも
自家用の今日は酔わしてならぬ婿
同

事故0と新聞嬉しい記事のを
枝葉
せ
ゆずり合う道に郷土の花が咲
同

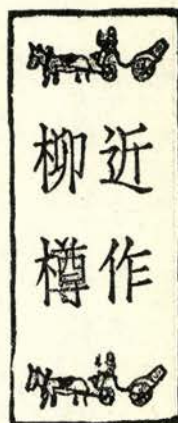
一秒をあせり一生わやにする
越山
泣いたとて事故は白紙に帰え
無鬼

違反0事故0巡査も腰おろし
可住
運転の自信は規則をよく守り
同

湧く事故を生きた川柳の句で
枝葉
防せ

こりと痛みに
サロンパス

久光兄弟株式会社
東京・佐賀・大阪



麻生路郎選
北川春巢選

すりへった下駄で噂を持ち歩き 愛媛県 川又 庸児
夜遊びはやまらずテレビ買った 同
集金の勘はお金を呉れない茶 同
早起きをして牛乳を断わる気 同
メッキ塗りなおし大会待つカップ 同
ゲーテ 愛す初夏の灯部屋に満つ 兵庫縣 常岡 孝風
寝るだけの下宿きちんと靴を脱ぎ 同
ダンピングし合う女にさえもてず 同
鼻の穴黒く都会の景気云い 同
花時計回り輪禍の世を忘れ 同
借りのある故郷夜来て夜かえり 竹原市 杉原 愛鳩
目ばかりがひっこりまわ サンガラス 同
やさしいこと云えば甘 父の年令 同

進学をさせて隣と不仲なり 同
大とらの立派な檻が自慢の署 大坂市 板倉天悟空
国と府と市から所得を調べに來 同

子供の日

床の間は年に一度の再軍備 同
蛍光灯へ仏の方がまぶしがり 同
貸し傘がみんなかえった五月晴 岸和田市 内藤きさ子
鯉のぼり新茶招ばれて帰る途 同
みおつくしわが家はみんな寝顔 同
紋付と袴 日本のいい男 同
オムツだけ入れた荷物を大事がり 兵庫縣 遠山 可住
スシ詰で行くこの先にお湯が湧き 同
セックスを知らぬ娘山へ行くと 同
客去んで女は元のヒスになり 同
芸術祭参加ドラマか寝るとする 石川縣 同村 虹要
めぐりあいああ戦友は保険屋か 同
お化粧のきれいな妻に支えられ 同
イエスイエスと おばあちゃんを煙に巻く 同
新婚の隣で視線まぶしすぎ 西宮市 樋口 寿栄



軸吟について

直原七面山

軸吟とは御承知のように、課題吟における選者吟のことで、普通選句の天の句のあとに付して発表されるのでありますが、軸吟について少しく私意を申し述べてみたいと思います。

別に誰が決めたと言う訳のものでもないでしょうが、大体選者が自分の選句する課題について作句したものの中から、選句された句の中の天地人の三才の句に匹敵するとも見劣りしない句を一句参考吟として提出発表し、もし自分の句が三才の句に対して見劣りするような場合は、軸吟の句は没句として、軸吟はありません。と発表するのが選者としてのエチケットのようになっております。

ところが大勢の選者の中には強心ぞうの方もあって、入選句の数がわずかに十数句しかないような場合でも、軸吟を三句も四句も発表する人があります。

さて、軸吟は三才天地人の句に匹敵する句であることが絶対条件



花が咲き花が散ったり嫁き遅れ	同	せんべいを買ったら鹿が集って来る	同
お若いと云われて値切る事をやめ	同	木戸銭のごと寄附とられ入学す	仙台市 平野 光道
ロマンスが欲しい一人で春の旅	同	恋人へ清潔な方になりすまし	同
物干台で隣の若葉觀賞し	神戸市 波多野 美由起	夫へ子へ孫へ女の夢つづき	同
花束を捧げるだけの晴衣裳	同	まわりみちした人生に友が出来	羽曳野市 石川 太柳
事故死した遺品のフィルム笑って	同	よく見るとそばかすが百合の花	同
パチンコを打つ目道楽には見えず	竹原市 山内 静水	紙一重とは慰めるよい言葉	同
妻にだけもてて平和な二十年	同	岡山方面一泊旅行 二句	
せめてもの給料袋のまま渡し	同	駅前の十階建は工事中	大阪市 半田 夏生
押しかけ女房の ^{ようテレビ} に居据われ	兵庫縣 河原みのる	旅の宿相憎くテレビ故障中	同
モチいいひとが ^{ありませ} の ^よ 悪びれず	同	報らさずに入院をしてうらまれる	同
大津方面旅行		讃美歌に心洗って明日があり	羽曳野市 島田 雄峰
さざ波も立たぬか自衛隊野球	同	人皆他人ハンドバッグをもぎ取 ^る	同
共稼ぎ蛍光灯がまだ買えず	西宮市 白石 良圭	真剣な手もと只今化粧中	同
一円貨の不足する世をおかしがり	同	叙歎され嬉しい顔もせぬ仏 ^{ハッイ}	上田 紅溪
夫の地位が私を着飾らせ	同	雑草の花にも鎌を休めて見	同
十県めぐりバスの旅 三句		新婚らしいのも来てる大砂丘	鳥取市 近藤 昭夫
へそくりの始末の旅に誘われる	松山市 河本南牛史	耐えかねて妻は便秘を訴える	同
合唱は遍照金剛で高野山降りる	同	P.T.A派手だ地味だと子がかまい	明石市 岩井 千甫

かと言う問題についてであります
が、私としては是非そうあって欲
しいと思います。

選者としての面目を保持し權威
を守る意味においても。

と申しますのは、すでにお気付
きの方もあらうかと思うのであり
ますが、軸吟の中の十中八、九ま
ではどうひいき目に見ましても、
三才の句にはるかに劣っているか
らであります。

もしこのことについて御異存の
方があればお手許の柳話、句報等
をお出しになって目を通して頂け
れば「なる程」とお判りになると
思います。

軸吟の方が三才の句よりも優れ
ていると言う句は、これは全く雨
夜の星で、めったにお目に掛るこ
とが出来ません。

そこで、その見劣りのする軸吟
を発表した選者が、その句会で他
の課題吟における成績はどうかと

本

福壽司

心斎橋筋大丸前

電話(271)三三四四番



にきび取りつけて化粧をあきら
同
みの虫が顔を出して花曇り 見島市 伊丹柳瓢子
情熱をくんだサボテン花をつけ
同
持ちもせぬ社の株にさえ気をつ 石川県 南 伝一
春斗に百姓ストがしてみたし
同
口止めのつもりハツサク一つくれ 兵庫県 斎藤たけお
ちと足らぬ男でバイクフツ飛ばし
同
恩給でさてばんやりと出来もせず 大阪市 三輪九文銭
クーラーへ風邪引 お世辞すぎ 同
満ち足りて诗情湧かないまま過し 貝塚市 護川 梢月
プレゼントの時計半年だけ動き
同
面白い方ねと色気ない返事 須崎市 高橋 蟠蛇
相談は飲ませただけで抄らず
同
およばれのポケット風呂敷し のげき津市 嶋野ひろし
定年のない政治家に国まかす
同
刺身皿灰皿にしていい機嫌 鳥取県 鈴木村諷子
へべれけに親父が酔って子供の日
同
連休の雨を喜ぶ無一文 高知県 山川 勝子
連休の雨を子供の馬になり
同
律義者往復はがきが足で来る 京都市 都倉 求女

子のことになれば無神論くずれ か
同
世渡りが下手で借金まだ知らず 玉野市 小谷 仙山
出動を待つ手袋は握り締め
同
戦争がうばった恋を追いつけ 今治市 越智 一水
温泉に勤めて歳を若う云われ
同
馬齢六十太公望にもなりきれず 遠野市 鈴木 二文
千松で泣いた親スーダラ振 泣き 同
口で考え口で働く御当世 伊丹市 小川静観堂
ビデオテープで いまの勝負を納得し 同
迷惑と云えぬ社葬へ狭い露地 新居浜市 小林 孝正
鏡台の中で母親子を叱り
同
宴会へ飲む顔亮るでないと母 枚方市 宮川 珠笑
恋人にバイトの手まめさわらせる
同
画架さげた娘女の線でなし 八尾市 吉田 博一
ふた月三月練って一泊の旅
同
死亡0老警官も狩り出され 大阪府 西本 保夫
パチンコ台の裏は化粧の無い素顔
同
論評もなく気抜けする野心作 青森県 木村 凉人
皿洗う音も亭主に物申す
同
真実と嘘の境の唾をのむ 京都市 大久保 和二郎

調べて見ますと、その方では可成りの好成绩をおさめ、句も選者の力量に相応しいものが入選しているのがあります。

で私は、こうした軸吟のおそまつの原因が一体奈辺にあるのかと、いろいろ研究もし考えてみましたところ、その原因の最大のものはなんと言っても、軸吟が「自選の句」であると言うことであります。即ちその原因は「自選」だからなのです。

自分の句であるがために軸吟を決める場合選句に「迷い」が（自惚れと、過剰な自信が悪作用して）生じ、結局とんでもない迷句を軸吟として発表しているのではありません。

例を私自身の過去の選者歴についてみましても、その数ある軸吟の成績は、自選のみで発表したものよりも、その場に居合せた、他の選者なり句友なりの目を通して軸吟を決定したものが相当句も優れており、三才の句に及ばずといえどもそんなに見劣りはしてありません。

従って、自選のみによる軸吟の中には、平抜き句にさえ見劣りするものがあり、いまさらながら赤面する次第であります。

選者は軸吟を必ず発表しなければならぬという規定はないのですから、自分の句を一応他の人に



考えて考えて義歯でガムを噛む	同	春雨にぬれて行く心は日本晴	岡山県	永宗 宗義
マママとママの女へ火をつける	貝塚市	判らない植木で鉢をほめて置き	同	同
美容体操ぐらいに思ってるセックス	同	弱虫は蟻螂にさえ斧ふるい	富田林市	浅川 八郎
行きずりの人に心の灯をともし	福岡県	夫への電話に坊やの声も入れ	同	同
喉通るミルクの甘さ故郷のこと	同	ガスほこり市内は呼吸が止まり	守口市	樋口 一峯
ありがたいとで居眠るお説教	大阪市	サケマスで弱い者いじめするソ連	同	同
棟梁の眼にもゆがんだ床柱	同	縁談は遂に世が世で纏まらず	新居浜市	安藤 桂仙
条件の裏が気になる良い話	竹原市	本借れば蚤をつぶせしあとがあり	同	同
ジュースしか飲めど三次会まで	同	三河島どれがわが手か人の手か	京都府	西村句楽坊
往年の才女とんちんかんを云う	芦屋市	小便が命ひろうた三河島	同	同
説教の耳聾に預けてる	同	ダンブカーが来るので端の端に	福岡市	吉武利喜太
職人の自信道具を光らせて	宮崎市	子の寝顔見ての酒にほろり酔い	同	同
人生の悲劇税金あるかぎり	同	女房の軒が迎える倦怠期	羽曳野市	松川 美郎
奥様は皇室ファンでよく太り	倉古市	母よりも女に生きた刑事室	同	同
ふたこと目には金々と妻も老い	同	胃の手術した人肴に酒をのみ	大阪市	川口 弘村
ラブソング聞き予習のペン進み	西宮市	飛び休み休む準備に出動し	同	同
米核実験再開に	同	さん付けで呼ばれて私用云いつ	布施市	古谷まさる
地下壕がよく売れ核実験もやり	同	女の子モデルのようなポーズする	同	同
水盆そんな悲壮も日本史	愛媛県	食堂のテラスほこりもたべさず	大阪市	堀 風仙洞
流行の魔術個性をすてさせる	同	お守りをつけた迷い子とは皮肉	同	同

スマートで
着心地良い



GOLDEN
O.S.K.の
紳士服

各地特約店に有り

選して貰って軸吟の候補句を定め、その句を三才の句と比べて見て(虚心に)匹敵するようなら発表するし、そうでなければ軸吟の方は没句にしてしまつて、男らしく「軸吟はありません」と発表してゆくのが選者として川柳を愛する最良の道のように考えられます。

次に、私も時々句会で体験することなのですが、選者の軸吟が読み上げられる時、五七五の中の五七三までが自分の投句した句と全く合じなので、「はてな」と思っていると、残りの二文字だけが一寸違ふと言つた場合があるのです。



小遣いに不自由しませんノドを持ち 豊中市 稲増 久雄
 ホウタイを巻き巻 テレス テレビ見る 同
 床に居て子等へ指示する電気釜 広島県 山田スミ子
 我儘を云えるだけ云う病める床 同
 食う事をだけ楽しみの春となり 大阪市 稲森けい子
 二三度女は胸へ当てて買い 金沢市 河合 卯翁
 各停の開いたドアから雞の声 河内長野市 森本黒天子
 茶摘唄春を惜しんだ声になり 松江市 岡崎 祥月
 パチンコで傘が乾いた空財布 神戸市 吉田 隆史
 かすがいの子らへ生活を建て直し 布施市 久米奈良子
 亡き妻を思わす吾子のにらむ癖 笠岡市 佐内 隆文
 見えすいたお世辞は軽く背で聞き 新居浜市 安藤 桂仙
 声量があくびをさせぬ市議でよし 笠岡市 高木 決柿
 胃潰瘍じゃないと云われた酒の味 松江市 宮本 竜作
 車内での闇米手玉のごと姐御 栗木市 高木繁太郎
 団地から百姓へ嫌な風が吹き 笠岡市 谷本鈍愚坊
 みずうみのボートも春を惜しみつ 松江市 岡崎 雪美
 客かえし喧嘩の続き又始め 瀬野市 福井与太郎
 血圧で保険勧誘恐がらせ 大阪市 万代句念坊
 春雨も武装する娘の世に移り 芦屋市 三上 美路

交通事故サクラのように散てゆき 七尾市 松高 秀峰
 若過ぎる母へ先生もどきまぎし 高知市 須藤 俊江
 折合の話飲む気の額を出し 金沢市 根上 杏花
 赤旗が並んで平和のように見え 岡山県 久戸瀬春光
 ふるさとは遠く行楽日の孤独 小倉市 三井 酔夢
 ソーダ水レースの手袋美しく 出雲市 中川 晃男
 下戸の妻客の手酌に気がつかず 玉島市 田辺 好女
 石をもて追われる如く卒業す 大和郡山形市 松本 峰水
 一人旅湯上りの身をもてあまし 玉島市 井上 旭峯
 植木屋はやたらに蕾ほめて売り 姫路市 隠岐 不醉
 腐っても鯛が顧問という座に居 笠岡市 松本 忠三
 当店のくじ当選に買わされる 大阪市 山田 蛙水
 気前よくさされた訳をあつて知り 見島市 守谷秀二朗
 かめかもめ仲仕二人の連小便 神戸市 大野木真砂
 籠の鳥あきらめている顔でなし 玉島市 水粉 千翁
 プロレスにシヨク死あそび人気が出 岡山県 岩道 博友
 老いの欲ただ親切がほしいのみ 大阪市 井石 泰泉
 ワンマンがここにもいます鯉のぼり 大阪市 宮尾あいき
 だて眼鏡患者へ若さ隠くす医師 大阪市 福井 竜昭
 生き延びただけの還暦子にすまぬ 金沢市 根上 杏花
 大掃除若い日の手記しばし読み 羽咋市 三宅 ろ亭

味のてー

モダン 川柳

心斎橋大丸北の辻東へ

御 門

TEL(271)6684

御集会には階上御利用下さい



が、これも私は選者として考えなければいけないと思うのです。

こう言った場合は当然、投句者に花を持たせる意味も含めて、選者の方は謙虚に自己の句を取り下げるべきではないでしょうか。

そうある事の方が川柳発展の面から見ても非常にプラスですし出来るだけ投句者の方々に発表の場と入選の榮譽を与えるところにこそ、川柳は人間陶冶の詩である存在価値があるのではないでしようか。

軸吟についてこの外いろいろと御意見をお持ちの方々もあろうかと存じますので、私見に対する御批判その他御研究の一端を誌上を通して御発表頂ければ幸甚の至りであります。

写真説明：前列左から 篤生・春巳・森口先生・水客・路郎先生・鏡子・高野子・まゆみ 中列左から ふみ・聖子・綾崎・雅明・宏敬 後列左から 敬太・宇彦・多美夫・一人おいて かつみ・和弘・一人おいて まこと・政信・大福



麻生路郎先生講演会

川維奈良支部創立一周年記念

とき 六月九日(土)午後一時
ところ 奈良高等学校お茶室

高校生ばかりの異色支部として、先輩川維支部に伍してここに創立一周年記念を迎えることになった。一年前、路郎先生によって手ほどきされたボク達もやっとな柳二年生になるのである。

路郎先生は今夕ソ連の作家とのご懇談予定があるご多忙の寸暇をさいて、ボク達のために記念講演会にご出席たまわったのである。宇宙の英雄ガリリンの話から川柳の定義に至る一時間余を熱弁ふるってくださった。

ユーモアをはさみながら、高度な問題を判りやすく親しく講演くださった間、生徒会新聞局のフラッシュが左右に燃えあがった。

兼題「奈良」の披露が路郎先生によつて終った頃、料理クラブから手製のビスケットとみつ豆が出て、路郎先生も非常によこんでくださったことは望外のよろこびだった。

「一年」は笛生選、「雨」は水客選である。水客先生からも柳話を拝聴し、内海敬太支部書記長が支部の団結と若さを強調した。

若さと熱でボクたちも「いのちある句」につづくのだ。

大阪通信病院

烏ヶ辻川柳会

青葉吟行

五月二十七日(日)

於河内長野 楠旅館

兼題「奈良」 路郎選

一寸一服ここから奈良が見え
まつせ 多美夫

観光地鹿はおじぎの役もする
宏子

鹿の眼は昔ながらに青葉する
水客

大仏がガメツイ此の世見てお
春己

住み馴れて大仏さんの久し振
笛生

さびしさに鹿と遊んで芝に
紋子

奈良までも都市計画が進み出
満智子

有難や恋人たちの奈良の森
雅明

鹿といふ芝生は奈良のもつ自
まゆみ

慢 ツイストはひなびた都奈良に
まこと

一の鳥居彼と彼女は腕を組み
敬太

春日山万葉の香が残っている
宇彦

いにしえの奈良は他国の人の
宏敬

大阪通信病院烏ヶ辻川柳会の青葉吟行を兼ねて、若林草右副院長、淀通信病院薬局長の市場没食子氏、大阪通信病院庶務課の西辻竹青氏の停年退職送別会が、河内長野市の長野寮で五月廿七日の午後から催された。



写真説明：右から北川雅雄氏・市場没食子氏・市場没食子氏・若林草右氏・路郎先生・会長足立春雄氏・西辻竹青氏・水谷竹枝氏・太田良子さん、その外。

私の一生はこの子ですと未亡人
ハナ子
平凡な一生妻に望まれる
雪彦
人生の春夏山で終り 春雄
片手間で始め今では文化財
片手間に張る母子寮の賃仕事
草右
片手間に書いた原稿見直され
風仙洞
再会のどちらもベレーかぶつ
竹荘
再会にお待ちになってとはず
春巢
うずうしい 史葉
再会にどなたでしたと聞いて
カネ女
極秘だがとほのめかす酒の上
没食子
一門を集め極秘を打ち明かし
竹青
父の日になって終った子供の
まさる
宿直の旗日一升下げて来る
愛論
昭和の旗日ビル代表でひるが
宏子
人並みにやとりますと事務
幸男
金出来て情夫が出来てよく太
路郎
相性がようて情夫と永ういる
藤児
一生のことやと娘きき入れず
良子
一生をコマギレにして眠りた
愁花
路郎

評句

リレー



堂 圭 井 堂
步 八 西 步
な じ む 月
月 文 林 遊
遊 舟 口 樋
吉 大 高 小
大 高 小 樋

鼻にしわ寄せて抽象画をみる
水客

圭井堂―場所は百貨店かの催し
場で「みてる」人物は相当年配の
男性で決して女性ではない。なぜ
なら年配の女性に分かるぬもの
も、分ったような顔をして、さも

感銘したような恰好をしつつ素通
りしてしまい、亦ハイティーンな
ら、訳の解らぬ画をわざわざ立止
ってまで見ている筈がなく、さっ
さと出て行ってしまう「みてる」

とは、見入っているの意で、画題
と画とを七三に見較べ乍ら、何か
をよみ取ろうとしている情景が、
上五でありありと浮んで来る。水
客さんならではの句だと思えます

八歩―抽象画は僕にも苦手だ。
文化の日等に、市内のDデパート
や小学校で、県下の書画展覧会が
催され、時々出掛けるが、抽象画
と名のつくもので、いいなと思う
ものは十の内一つか二つ位しかな
い。(或いは僕の理解力が足らな
い故かも知れぬが)鼻にしわ所か
頭をかかえ込んでしまう方が多
い。カンバスに絵の具を思い切り
ぶっつける勇氣には感心するが、
画いた本人にも訳が分らないもの
の中にはまぎっているように思わ
れる。僕はむしろ空を流れる雲の
姿にいつも心を引きつけられる。
その変化に富んだ色彩と姿態は、

永遠の希望さえ与えてくれる。抽
象画のむつかしさは分るような気
もするが、独りよがりや、こじつ
けの画は止めて貰いたいといつも
思う。鼻のしわを生かして、現代
の一世相を、この句はたくみに詠
んでいる。

むじな―抽象画を持って来た
為、句全体が生きているし、意味
深長とも云える。大部分の人は抽
象画はわからないのではないか。

抽象画を見る毎に私は「我々は
鳥のなき声聞いて何かを感じと
れば良いのであつて鳥のなき声が
わかる必要はない」と云う言葉を
思い出す。しかし私も抽象画はわ
からない、画を見て題を見てもう
一度画を見て題とのつながりを見
出そうとする。鼻にしわが寄って
来るのも此の頃だろう。

文月―この句を読んで、こんな
光景が眼前にうかがふ―町の公会
堂か学校の講堂に催おされた書画
展の一隅、ほとんどの參觀者が一
ベツさえ与えぬ意味のわからぬ一
迷画の前に、中年すぎの一サラリ
ーマンが、画の真正面に立って正
確に画と対立し、まず画を見、次
に題名・作者の名札を見、また画
面をしばらく凝視し、わからぬ画
の中から何物かをつかみとろうと
している―さびしくもほほえま
しい光景。「鼻にしわ」がなかな

かよい。

舟遊―過

日京都のフ
ランス展を
鑑賞、近代
美術の先駆
者より、印
象・新印象
・表現・抽
象・絵画前
衛主義など
十九世紀

二十世紀ははじめにかけての美術の
発展を世代から世代へと、つねに
決然として製作されていた。ミレ
ー・コロドーダ・セザンヌ・ゴッ
ホ・ロダン・ピカソ・ドローネー・ベ
ラスネルといった美術家だった。
抽象画になってそれこそ鼻にし
わ、しかし其のなかに、なにか有
る気もするが理解にくるしむ。こ
の句は「鼻にしわよせて」と抽象
画を結んだ動かないうまみがある
と思う。美術も音楽も詩もその時
代の精神を反映し発展するので抽
象画といえど画であるように川柳
もいろいろあつてもよいものだ。

圭井堂―抽象画も前衛も随分世
の人々から、けなされ続けていな
がら一日一日その地歩を固めて来
ているようですから今に「鼻にし
わ」をよせずに理解出来るように
なるかも知れませんね。

八歩―文化の発展と云うもの
は、平凡から非凡へと進んで行く
ものらしい。文化の進むにつれ
て、鼻のしわは益々深くなつて行
く事だろう。

むじな―抽象画はわからない。

と結びつけて見ると鼻にしわよ
り、ひたいにしわ寄せてではない
か。抽象画だから鼻にしわでわか
らないに結びつくが、鼻にしわと
は一寸考えて見るとおかしいよう
に思う。

文月―僕には抽象画は苦手であ
る。この句に関連して思うこと
は、縦・横・奥行の寸法のはいつ
た画が、そろそろあらわれてもよ
い時代ではあるまいか。

舟遊―この句を読んで鼻にしわ
をよせて自分の顔を鏡で見たり
したが、やはりこの場合「ひたい
のしわ」より「鼻にしわ」のほうが

日本 中国の文化財をあつめた美の殿堂

大和文華館

松浦屏風 一字運台法
華経 役党物語絵詞め
雪中舟牧図をはじめ
絵画 彫刻 書道 陶磁
漆工 金工 染織など
国宝や重要文化財をお
さめています
開館 毎日10時～4時
(月曜休館)
学園前駅下車すぐ

近畿日本鉄道

がよいと思う。句のリズムもよいし新鮮味もあり文句の付けようのない佳句だと思ふ。ただ軽い写生句だけに人間の心髄をゆきぶるといふほどの句ではないと思ふ

女客のいちいち味の事にふれ

竹 莊

圭井堂「川柳料理暦」の御大竹莊さんであるだけに、こと味に關する限りその神経質さがこの句を生んだと思ふ。殊に女客は男客ほど失礼だが食通でもないのに、割合に單調な味の批評をしたがる癖があります。中七がそれでおまけに色彩がどうの、器が斯うのとまで想像出来る女客のうるさいところを、ずばり詠んだ私の好きな句です。

八歩「いちいち味の事にふれのいちいちがよききいてる。女心の細やかさ、うるさを作者はよくとらえている。その批評も、女客のこと故、さぞかし賞め言葉の連続であろう事も推察される。最も訪問先が知人宅でなく、飲食店とか料亭なれば、恐らく毀譽褒貶相半ばすることと思ふ。

むじな「いちいち味の事にふれのいちいちが賞め言葉でなく一つ一つに少しづつ難をつけるのではないか。其れでこそ女客が生きて来るのではないかと思ふ。しかも

「味の事にふれ」と云いながらも味の批評ではなく、ほんとうにつまらぬような事ばかり云いたがるのではないだろうか。

文月「昔の井戸端會議から水道會議、露路會議に至るまで、女人の話題はこまかい、しかし身振りや言葉は、なかなか仰々しい。

女客から入ってくる訪問者の女客から、勝手口からチョコチョコとはいつてくる、お隣りの奥さんでも、お茶の匂い・お菓子の味・どのメーカーの匂い・おいしいとか・さてはおすしの味・主人公（こちらの主婦）のお手並みまで、遠慮なくベラベラしゃべる。もちろんごちそうになったものの味をはめることは忘れない。

「女客」と「いちいち」よい語句だ。これが男子なら「しまいに」とか「少しは」とかになるだろうし、また全然味のことに触れないかも知れません。

舟遊「割勘で来た温泉宿の女客だと思ふ「いちいち」で品数の多い和食だと思ふ。訪問先だと「妻の客」となるし、また賞め言葉だったら「ふれ」でなし「はめ」になる。

「この温泉も田舎だ」大阪の料理屋の刺身がどうのこうのと、はての自慢話だ、女客相手の私にはよくわかる。女の口のうるさがよく

く句に出ている「いちいち」が句を活していると思ふ。

圭井堂「団体旅行で来た温泉宿の風景で「いちいち」と「ふれ」でいかに女客のうるさが想像出来た。

八歩「女性はお台所の責任者であるから、こと味覚に就いては、特に関心が深い。毎日料理している食物故、それが、他人の手で造られたものとなると、自然批判したい気持ちにもなるであろう。いわばお料理の批評は、女性に与えられた特権とでも云うべきであろう。

むじな「いちいち味の事をとやかく云うのは女の習性、それを捉えたのは作者の觀察で訪問先か温泉宿かは読者の感じたままでいいのではないか。作者の意図と読者の感じとの喰いちがい小説にもある事、まして短詩文学において、そこ迄云々するのはいい過ぎではないか。読者は読者の経験で感想が違ってくる事も止むを得ないのではないかと云つてしまつたらリレー句評も成り立たなくなるだろうか。

文月「温泉宿の場合でも、個人の宅を訪ねた場合でも、女客なるものは、味に關する批評はえんりよなくすると思ふ。ただ個人の宅の場合と、温泉宿などの場合と

は、その態度や言葉つき（叮嚀さなど）が、よほど違つてくると思ふ。

舟遊「前衛派川柳から見れば少々古くさい。もう少し新鮮味が欲しいと思ふだろう。しかし伝統派からすれば、女客のうるさが目の前に見え、文句のない句であると思ふ。また作者の意図と読者の句評との喰い違いは云うまでもない。しかし読者としていとおう正しい句評はすべきだ。名句と云うものは、読者の句評で成り立つもので、作者は説明すべきでない」と云う話を路郎先生に聞いたことがあります。（担当・真鍋一瓢）

★

ヒと云う口もと

紅原綺史 朗

「女のえくぼには城を傾くとむかしからいわれているが、男性側から見ると女の美しさは、やはり笑顔にあるようにある。」

女は愛さようとはよく云つたものだとおもふ。
女は、いつも「ヒ」を発音するようにしていると、顔がやわらかく愛らしく見えるのだそう。それとは逆に「ブ」を発音するようにしていると、仏頂づらに見えるようである。

「女子見るなら豆時見やれ」女の素顔を見るなら忙しい季節に。といわれているが、恋愛中なら何年経っても、女の素顔は拝めないうようである。女が素顔を見せるときは、もう勝負ありの時か。

その素顔になつても「ヒ」の口もとで人に接すると、そこから和がもしたされ、相手の「ブ」の口もととも、やわらいでくるから、「ヒ」の口元また楽である。

そこでボク、鏡にむかつてヒをやつてみたが、ボクはボクなりに「ブ」のはうが似合っているようだった。

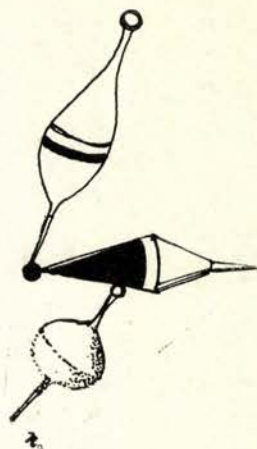
何を選んでいたぐくかは先様におねがいして
タカシマヤの商品券を
お贈りするのにも 心に
くい贈物かと存じます

一〇〇円から
一〇〇〇〇円迄
大阪・東京・京都
3店に共通です



なんば本館 大東 京本館
高島屋

特集 川柳入門の動機



川柳という川へ、あの瀬からこの

泉から、流れ流れてひとつとところ

に落ちあつた私たちである。この

川はとうとうと永遠に流れるのだ

(順不同)

自分の俳句が

川柳だと

云われて

直原七面山

終戦直後職を辞して疎開先の長野県松代から帰郷して一年位経った頃には私は友人を誘って文化協会を作り、政治問題の研究や音楽、演劇、ダンス、文学と幅広い文化活動をつづけていた。

昭和二十一年の九月、私は丸山弓削平、黒田笑泉の両先輩の進めを受けて、中銀弓削支店を会場とする俳句の句会に迷句を提げて初めて出席した。

ところが先生から、「誰かね、川柳を作って出しているのは……」と言われて私の句は川柳のレッテルを張られ、しかも句評の外のものとして扱われ、私の面目は丸潰

れであった。

そこで私は句会の帰えりに、弓削平、笑泉両氏に、「俳句になってないそうですからもう次の句会には出ませんよ。」と申し入れたところ両氏とも、「まあそう言わずに……一度や二度では……とにかくもう一度出席してみても……」と申されるので、「なる程それもそうだ。」と思ひ十月句会にまた私は力作を引っ提げて出席した。

ところがです。どうでしょう。一句たりとも抜けません。

しかも措大先生はただ一言、「この前言っておいただけですがまた川柳を出している人があります。今後は絶対に川柳は作って来ないようにして下さい。」とのこと。負い立っていただけに私はこの言葉を聞いてすっかり参ってしまいました。

そこでまたその帰路、「もう誰がなんと言つても句会には出ません。」と言ひ切つて別れたのです

が、十一月の初めになると、わざわざ弓削平氏がやって来られ、「とにかくもう一度だけ僕の顔を立てて出席してくれ。」と熱心に説かれたので、私も心ならずもまた急いで句を作り第三回目の句会に出席しました。

相変らず句は抜けません。抜けぬどころか、さすがの措大先生もお腹立ちの御様子で、「なんと言つても川柳を作つて来る人がいる。一体これはどうしたことです。とにかくこれらの句は箸にも棒にもかかりません。だが川柳句としてならかなりの句のようにも思われるが……。」とお顔に朱をそそいでの酷評。

その日はまことに月のキレイな晩でした。私は両氏に、「もう今輪際句会には出席しませんよ。が然し、少くとも虚子先生の高弟のうちの一人で、県下にその人ありと言われている俳誌『さざり』の主筆者たる平松措大先生が、三回は三回とも僕の句を見て、これは

「川柳だ、川柳だ。」と言われるからには、僕の句は一応川柳になつては違ひない。いっそのこと僕は、俳句は諦めて川柳をすることにしますよ。」と申しましたところ、笑泉氏も、「川柳なら僕も腰を入れてやってみよう。」と希望を述べられたので弓削平氏も「そんなら川柳をやってみることにしますか。僕の岡山の親せき(名を忘失)で『川柳雑誌』を取っている人がおるから、至急そこへ連絡を取ってみよう。岡山では川柳の句会も開かれているから、三人で出席してみようか。」と相談が一決してその夜は別れました。

そして私達三人が打ち揃つて、岡山の禁酒会館で開かれている川柳岡山支部に参会したのは丁度十二月の半だったと思う。

その日の句会での成績は両氏よりも私がかかなり良く、しかも席題「窓」で、

盗人の逃げた窓から年が明け

と言う天の句をものしたりして至つて鼻高高であった。

そしてその時初めて私は先輩浜田久米雄氏を知った。

私の川柳入門の動機と言えは先ずこう言つたところですが、いざ十数年の川柳生活から果して「なにを」得たでしょうか。

得るところのものは実に盛り沢山ありますが、その中の二、三の

ものを拾い上げてみましょう。句作上頼りになるのは結局は己れ自身だけであると言ふこと。

自己のもつていゝるもの以上のものはなにとつて句の中に織り込むことは絶対に不可能であると言ふこと、(裏返せばとにかく背高は出来ないのだから勉強し、自己を鍛えて行かなくては駄目だと言ふこと。)

また多勢の中には、川柳を文学としてではなく、自己の生活の糧を得るための一つの手段としてこれを利用し、その行動も、川柳活動も全てそこに直結していてフェアーではなく、いとも心汚げに、心浅ましげに見える人もときたまにはあると言ふこと。

ところが、それとは全く正反對で、川柳を純文学的に追求し、川柳をより良き人生生活の伴侶として人格向上の質に充分供している人もかなりあり、こうした人々の豊かな知性や、香り高い情緒や温かく円かな人間性にふれると、思わず頭が下がり、この人々の作り出す作品の中には、まこと「力」に満ち溢れていて、しかも抑めどもつきめ味いを持ち、後光の如く光り輝いて、路郎先生の仰言る「いのちある句」の数々が散見されると言ふこと。

そしてまた川柳界には案外理論家が少なくと言ふこと。まあそう言つたところでしょう

かわやなぎと せんりゆう

野村 味平

唄っても、踊らしても、上手で器用人であった亡父は、わたくしの小学校二年生になった頃から、煎茶を買いに出すにも、「かわやなぎ」と、反復させて使いに出したものである。が、このお茶の銘柄を、暗記することが何故か出来なかった。ついに、業を煮やした亡父は、或る日、使いにやるわたくしに、「せんりゆう」と、反復させた。ところが、これなら案々と喋られる。もう忘れるなよと、暗記させられたが、後々までも、どちらがほんとうの名前かと、判別するのに困ったものである。この「川柳」に、炒り立ての黒豆を二、三粒入れたいい匂いのする朝の茶を、亡父は旨そうに、のど仏をぐうぐう鳴らして、飲んで居たものであるが、この煎茶を喫すると、いい声が、のどから出るとは、亡父から聞き覚えたことである。

いつであったか、東京から来た人に、わたくしの頭を撫々して、この子も大きくなったら「せんり

ゆう」を作るようにきつとなるぞよと漏らしていたのが、折りに触れて、亡父を憶ふ思い出になった。「川柳」とは、どう言うものやろうかと、知ろうようにもせず、いつか、わたくしは、成人になっていった。自分の作った小唄に、好きなように節をつけて、「作曲の真似ごと」「現今の歌謡曲」そのメロデーを堪能していたが、他人には聴いて貰いようはなかった。自分自身が満足すれば、それでよい、と、優越感に素晴らかった。

今の川維大聖寺支部の杉浦醉半君が、勤めている日印刷所へ、わたくしが、ときどき邪魔したのも、もうかれこれ三十年以前にもなる。この時分の日印刷所には、今、石川県美川町に住む小林公氏、金沢市の小野陽風園に居て、今も、北国新聞の柳壇で、健吟を見せて呉れる林山々氏や杉浦醉半君が勤めて居られた。

或る日、いつものように尋ねたわたくしに、川柳雑誌と番傘とを見せ、どうですかと言われるので、咄嗟に、雑誌の批評かとも合点したので、これは短詩とも思いますが、川柳雑誌は新しい系列で、番傘の方は、古い系列のように思われると答えると、そんなことはどうでもよい。川柳を句作したらどうかとのことで、恰度、今晚、句会を持つから出席しなさいと、言われるので、「川

柳」とは、判らない判らないで出席したのであるが、席上、景色の出題が目についたので、「景色がいいよ、尻を据えんかな」と恐る恐る出句したところが、今は、金沢市に住んでいる高田茶撫朗主幹から、これ何やと、あきれたものであるが、いつの間にか、わたくしも、川柳を作って、柳人諸氏の仲間に加えて貰うようになった。

わたくしは、気が短かくて、いつも、イライラよくよとして、心の平静に欠けていたのに、川柳を句作するようになってからは、常に心の平衡が保てるようになった。川柳に精進することは、宗教への信仰と、何の変ったところもない。悟道に徹するには、ほど遠くとも、人間も一と廻り大きくなったような気さえる。これも、一と重に川柳の力で、ご指導して頂く路郎師のお蔭であると思ひ、心から嬉んでいる。

★ 川柳は 大人の文学

飯降 白香

たしか、第二次世界戦争がはじまって間もない頃のことと思う。六年住みなれた大阪をあとに、母の故郷奈良県宇陀郡室生村向洲へ

疎開したが、毎日毎日出征される方々の御見送りで大童だった。丁度翠光氏もその一人で私は隣組という関係でその出征の前夜の宴に招待された。その宴半ばに氏が達筆で巻紙に川柳を書かれ、日本男児の意気のはどを示された事があった。当時その句を拝見して、俳句としてはあまり俗だが、そのものズバリの表現がなかなか魅力的であったことを記憶している。

当時の私は、高等女学校の教員で、ロマンチックな夢に浸り且つあこがれをもっている時で、川柳は文学史の中にもあるもの、たとえ現実にあっても、口にするほどの内容のあるものではないときめてかかっていた矢先の事なので翠光氏の句に実は驚いたのであった。そして川柳雑誌というものの存在を知ったのであった。その後翠光氏が凱旋され、終戦後の慌しさの中で、私に川柳雑誌を見せて下さって、毎月川柳雑誌を寄贈して下さい、時には同村に疎開してられた路郎先生のお話をおききする機会をつくって下さった、氏の厚情は実に有難い限りであった。

しかし短歌の世界に住み、そこに自己のいのちを見つけて歩んでいた私にとって、この厚情は心苦しいもので、「作れないわ」とのことばで、それにお答えするより他なかった状態であった。船場の嬢

ちゃんで成長してきた私、欲しいものは何でも手に入れることのできた世界から、戦後すべてが不如意勝ちになり、どんなに欲しくても限界と摂度とを弁えねばならない世界へ入った時、私の物を観る態度尺度に徐々に変化がおこってきた。この変化は私にとって大きな自己改造であった。

皮相なわがままな人間から深さと味をもった人間への脱皮が行われはじめた。「物を観る」ということ即ち対象把握の問題もこのような心の成長にまで到達しなければ得ることの出来ない精神状態であることを自覚したのであった。

このような考え方は川柳雑誌から学び得たものといっても過言ではない。先生馬鹿の私にとって川柳雑誌に描かれている世界は生々

疲労・食欲不振・神経痛・便秘に



しい現実の種々相を示してくれ、そこにはあらゆる人間が出没して、その生態の交錯は時には笑を時には批評を私に教えてくれた。この意味に於て、川柳は大人の文学であると思う。

確固とした人生観世界観のバックづけなしに創作できぬ文学だと思ふ。特にその特質たる「うが」は次への高い批評精神がなければ創作出来るものではあるまい。短詩型文学の一つとして、最近川柳が隆盛になってきているが、この批評精神をもって創作する時に、はじめて路郎先生の「いのちあるまい」が出現するのではあるまいか。川柳生活などといえるほどの柳人ではないが、川柳に関心をもち出してから十五年余り、路郎先生の鼻くその部の門人の私にも、遅々とした歩みではあるが、私は私なりにこの批評精神を身につけることのできた事をうれしく思っている。今の私は川柳雑誌をよむことのようこびと、より高き目標に向つて私のベースにあった方法で不断の精進をつづけていくことがあるのみである。

★

娘の国文の教科書から

後藤 梅志

ボクの川柳入門の動機はよほど

変っていて、お話すると大ぶん長くなる。私は元来、松雲舎而噓という俳人宗匠の作で、川柳とは大分縁が遠いのである。ちいさい時分から俳諧の運座というものを見てよく知っているばかりでなく、五つ六つから、親父に聞かされた吹く風をなこそ（勿米）の関と思えども道もせに散る山桜かなという源の義家の和歌をいつの間にか暗記して、節面白く田舎の銭湯などできかせたことがある。一寸神童じみたところがある少年時代でもあったが、貧乏なくらしを染々味わつて遂に東京へ出ることになり、その後は勉強よりも小説を読むこと、寄席へ通うことなどに熱中し、頗る早熟な青年時代を過ごした。だからその頃すでに哲学書もよみ、学問はそつちのけで、トルストイやモーパッサンの翻訳物から新旧の小説類はたいい読みつくり、友達も俳人連中が多くなかつた。勿論、久良伎とか剣花坊や飴ン坊の川柳なぞは目を通した筈だが、単なる娯楽欄の中の気休めの範囲でしかなかった。ただ然し不思議なことに、私のつくる俳句は、友達からべっ視されてものにならなかつた。それもその筈、俳句友達の中でも天才視されていた加納香魚溪という十八才の少年が

に、同じ年輩の私は、忘れ録取りに戻れば屁ひり虫というような駄句を作っていた。さて私が川柳に着目したのは、昭和十年頃、長女次女を相次いで女学校へ上げた頃で、或る時、娘の国文の教科書を読んでいる内に、ふと古川柳に目が止まった。それは

月に投げ草に投げたる踊りの手
押さえればススキ放せばきりぎりす

というような句で、七八句あったと思うがそれが非常に新鮮に感じられた。それから研究を思い立ったもので、誰からも教えられたものではない。然し、古川柳の良さは、他の古文学に比較してそう劣るものではないと、今でも思っている。

川柳によって益していることはといへば、若返ることだ。つまり私の青年時代の情熱がそのまま作句につながっていることで、それが私の精神生活の支柱になっている。

しかし、私は川柳に熱心になつて教えられたことがある。それは「如何なる良器であっても、万能のものはない」ということで、川柳は実にいいものだが、字数が僅か十七字のもので、十七字という短文では表現出来ぬものがあるということだ。たとえ十八字、十九字にしてもそれは同じことで、表出現れざるものを出来ぬ。その時

は、句づくりは止めて、味わう外はない。又、考えるより外はない。これがまた大変いいことだと気がついた。ひよっとするとその中からまた句が生れる。

これは川柳の亡者になつてはじめて気が付いたことで、世の中の深さには頭を下げるより外はないと悟つたのである。

★

句会から

永松 東岸

川柳入門の動機は昭和二十五年秋頃と思うが大森娘句楽氏宅で開かれていた句会に誘われ出席したことからであつた。当時娘句楽氏宅へ路郎先生の句碑建立の話が起りその年の十二月、先生が打合せの為、同氏宅を訪れその夜、先生をかこんで句会が開かれたが先生が兼題石の選をせられた。

この時の天位が「墓石の雪払えども払えども」と言う三村柳風子氏の句であつた。その翌年五月句碑の建立は成り「古くとも僕には仁義礼智信」の句碑の除幕式は柳人多数を迎えて行われた。この頃から僕の川柳への関心が始まつたのである。

当時先生は山陽新聞柳壇の選者をして居られたが、ほつぽつ投句も始めたように記憶している。又句碑建立除幕式に大阪から須崎豆

秋さんが見えられ、当時大万川柳がやっと始まつたばかりで、娘句楽氏の知さんの大森苑女さんが花々しく大万でも活躍されて居つた。

川柳を始めただばかりの僕にも大万川柳への入会をすすめられたが、自筆で書かれたらしい句報を一部いただいた。

いつか入会の決心はしていた。だから僕の川柳歴は大万川柳の発足とはほとんど同時で、もう何年川柳をやつて居るかは大万川柳に聞いてもらえばわかる訳である。その後大万川柳の三年目の途中から入会している。だから、川柳入門の動機は友人につれられて句会に出席してからであるが、始めて間もなく路郎先生のお目にかかりその選を拝聴し又、句碑に書かれた「ふるくとも僕には仁義礼智信」の句が僕が川柳への道をすすんだ決定的な要素となつたものであ



る。

人それぞれ水井荷風が好きであったり、松本清張や火野葦平が好きであったり、川田順の短歌が好きであったりするのもコッソリとその人の心に響くものがあるからであらう。僕が路郎先生一本に進んで来、これからもそれ以外考えても見ないのも多分にそんな所があるからである。自分の性に合わない川柳は読んで見たくもないし頭の浪費だと考えている。

それならば川柳で何を待たであらうか、何かを得ようとして川柳を始めたものでもないが、今よりもっと淋しい生活であったらうと考える。もっとも短歌か俳句かいずれかに頭を突っ込んでいたかも知れない。先日(五月二十七日)有本芳水先生を招いて吉水町短詩文芸大会を催した。芳水先生は短歌百五拾首の内、九首抜かれたがその内僕の出句したのが二句入選した。

―指輪一つ買ってもやれぬまま妻の指はあれたり十とせをすぎて―
―麦の草しばらく抜きて見返れば妻の姿の見えかくれする―
俳句では、「身寄り無き人を看護りて春寒し」

川柳では「男の子すぐ金槌を探し出し」が天位に入賞した。短歌の指輪の句は芳水先生に短冊に選歌として芳水しるすとして書いていただいた外に先生の詩「春は名のみの野つかさにたまたま逢いし

旅人よ笠かたむけて春の日を君はいつくに急くらむ 芳水」を書いていただいた。

短歌俳句に素人の僕がお義理で出し出した句でこっちの方がびっくりしてしまった。芳水先生の話も人真似をした句ではないない自分の句を作れと語られていた。路郎先生の言われている事と一緒にある川柳をやって何を待たかと言われても困るのであるが、路郎先生と言う良き師を得た。そうして作られた川柳の一句一句は僕の足跡である。いつかは消えるものであっても今その足跡を振りかえって見る事が出来るのは楽しい事である。これからも僕の足あとを力強くふみしめて進んで行くだけである。

★ 入門カルテ

山川阿茶

南区には「南区医師会々報」なるものが毎月発行されていて、その編集兼発行人が生々庵氏であります。私が避難先から借金コンクリートと云いたいが、やっと借金バラックを建てて南区に帰って来たのが昭和二十五年の末で毎月会員に配布される会報で杏林川柳会の存在も知り、句も見せて頂いたわけで当時は蘆水・生々庵・珊瑚枝郎・一哲・瑞川・拾舟・無名林・迷路・鳥耕・弾正・比呂史(今の

五十六)と云った南区でのトップ級の先生たちの顔を並べておられました。

珊瑚枝郎さんや無名林さん迷路さんが句会へ入るようすすめて下さったのですが、その頃会場は会員の家を順々にまわっていたので、お歴々に来て貰って対等におつき合いする資力もないのにと二の足を踏んでいたわけです。しかし句を読んでいると作れそうにも思えるし、面白そうだし、句会へ出るまでにテストの意味もあって覆面で投句をしておったのです。無名林さんが手ほどきをして下さっていたのです。

口髭の生えて来そうな女史であり 阿茶

の句などその時地位にぬけた句で

その時に私が無名林さんに云った言葉があります「以前に私に野球を教えてくれた人があって、それから大変野球が好きになり通とまではいかぬが、放送や座談会に引張り出され、批評が記事になったりして野球を教えてくれた人より私の方が野球界で有名になったから、川柳も今にあなたより上手になって名高くなるかしれんよってまあ親切によう見といて」と、随分心臓の強い話でありましたが物にならんより苦勞の仕甲斐があった方でしょう。

手ほどきをした入選へかけつける 阿茶

これは先年市長賞を頂いた時「阿茶偉いことになったなア」と毎日の講堂へ飛んで来て下さった時の句です。

横道にそれましたが六か月程してどうやら川柳に近いものが出来るようになったので二十七年か八年かはつきりしないのですが杏林川柳会へ入れて頂いたわけです。

川柳をやってから 柳友としていろいろのお友達が出来たこと、

落着いて楽しむ時間がもてた事 退屈しない事、 作句の間は何も彼も忘れ去っている事、

考えが深くなった事、 物を読む時に注意深くなった事が眼立った收穫でしょう。嫌いな事には見向きもしない代り好きだと思えば喜怒哀にしろ、小唄にしろ、お花にしろ或る一線までの勉強をするのですが、その一線を乗り越える勉強をしない欠点が私にはあるのです。どうぞ川柳だけは今の情熱を冷さぬよう努力して物にしたいと思っています。

肩で息しながらついでゆく つもり 阿茶

★ 悪夢の十年

金井文秋

戦前講談社のキングや講談倶楽部が雑誌界最高の発行部数を誇っ

ていた頃、誰でも知っているように、素文の挿絵で川柳が載っていた。私はその川柳を読むのを楽しみにしていた。今の漫画川柳とは違つて古川柳を主に取り上げていたので仲々胸を打つ名句も多かった。

川柳のよさを漫画の為にこわすという非難の声もあったのは事実だが、小田夢路氏の句に 人はみな口を開けてる素文の絵

などがそれである。姿は絵に描けても心は絵にならない事を私も認めてはいたが、それはそれなりに面白く読めたものだった。

毎月楽しみに読んでいるうちに川柳の魅力に何時の間にかトリコになっていく自分に気がついた。

ザの心地
フェザー剃刀
フタそり

どんな古川柳が記憶にあるかと言
われてすぐ出る句は、

これ小判たった一晚居てく
れろ

かみなりを真似て腹掛やつ
とさせ

南無女房乳を飲ませに化け
て来い

まだまだあるが兎に角、庶民の肌
にびったり会う句や批判のするど
い句が好きであった。今考えれば
つまらない句でも当時は面白く読
んだものだった。現在知っている
古川柳の大半は当時の記憶による
ものだと言つてよい。

その間に読むだけではつまらな
い、自分でも作れないものかと考
えたのが川柳に手を染めた最初で
ある、昭和十年頃と思う。

作るからには何か専門の柳誌を
読まなければならぬと、あちこ

ち探し廻り阪急百貨店で最初に見
つけたのが番傘であった。それか

ら半期程して戎橋近くの明文堂と
いう書店で、柳誌が全部揃えてあ

るのを知った。初めの間は番傘は
じめ二三の柳誌に投句をしていた

が自分の進むべき川柳は「川柳雑
誌」以外にない決めてしまつた。

それから毎月かかさず投句
を続けたのだが、戦争さえ起らな

かったら面白かった川柳が、戦争
激化と正比例してだんだん味気な

いものになって来た、偽政者を批
判した句はにらまれる為か、軍国

政治におべんちゃらした句が多く
なつたのであろう。

おしろいを付けない顔を見
染められ

たしか当時の大家級の人が発表し
た句である。

酒

清



灘・魚崎

大塚合名会社 釀

この種の句が月を追うて誌上に
汎濫して来たので作句もだんだん

いやになり、投句も休み勝ちとな
つてしまつた。時も毎日の歌壇

であつたか、天位に抜けた歌が、
応召を受けて出征して行った兵士

が満洲の荒野で天皇陛下万才を叫
んで死んで行くという意味のもの

であつた。私はこれを見て憤激し
た。こんな嘘が高く評価されると

いう事はその反対に真実を書けば
没になるという事だから、それ以

来雑談欄への投句もストップして
しまつた。

それから数カ月して突然腹乃先

生の米訪を受けた。四五日して豆
秋さんが来て下さつた。何んとか

して投句を続けて欲しい句会も来
てほしいと路郎先生の言づけであ

つた。そして送つた句を四句抜い
て戴いて、其の内二句を豆秋さん

の推選で、句評に出して戴いた。
我が家はなかなか建てぬ大

工さん

親だけは家出を謎にしてし
まい

の句を大へんはめて下さつたのが
今でも忘れ得ぬ記憶となつてい

る。ところが突然の召集でこれが
最後のものとなつてしまつた。

しかし川柳を忘れてしまつたわ
けではない、南支に居る時に、未

発表だが

衛兵へ慰問のようにほたる

飛ぶ

などの句を作つたように覚えてい
る。

軍隊生活からは一年程で別れる
事が出来たが、帰れば商売の建て

直しに懸命で川柳どころではなか
つた。あれこれしてゐるうちに今度

は徴用だ、やっと解除になつたの
が終戦と同時に、その時は商売も廃

業してしたので随分いろいろな事
もやつた。二三年の間どうして生

き伸びたのか今でも不思議なくら
いである。

やっと元の木屋にかへつたのが
昭和二十三年、次第に生活が落ち

付いて来た或る日、ラジオから流

れる川柳に耳を傾むけた。それは
戦争中あれ程嫌悪した川柳の姿は

少しもない、自由と明るさがあつ
た。そうだがやはり川柳に還ろう川

柳こそ私の生甲斐だ。そして昭和
二十八年柳界にカムバックしたの

である。

十年の空白が知らぬ間に出来て
いた。それから数カ月して初めて

句会へ出席した。

誰にも推められず雑詠からはい
り、没と入選の差を研究して今日

に至つた私は、さらにある句風か
もしれないが、私は私なりに独流

だと思つてゐる。

路郎師

がこわ

かつた

が……



酒井ひか平

私が初めて川柳のようなものを
作つたのは昭和十年頃であつたか

と思ひます。

昭和十年から十二年へかけての
大阪は、大阪音頭のようにほとん

うにいい大阪であつたように思ひ
ます。

大阪島の内笠屋町の質屋の小僧
だつた私は、その頃南綿屋町の○

商店からトレードの申し込みに依
り移籍され、御寮さん付の丁稚に
なりました。

大旦那が島の内の顔であつた関係
で、冠婚葬祭係の私は、白井邸を始

め、辻阪邸、藤沢邸、肥田邸とい
つた島の内の豪家の内幕を知るよ

うになり、歌舞伎俳優、芸者、や
となの館へも行つたりして往時の

大阪の面を眺めました。又、借家
が住吉方面にたくさんあり、万才

師などの、家賃の取り立てになど
も行かされ芸人の世帯のやりくり

の難しさを聞かされました。そん
なことから何時とはなしに、私は

商人になるよりも、何か一つ書き
物師になつてやろうと考えるよう

になつたものです。もちろん空想
だつたのですが。

当時大阪の庶民銀行として大阪
貯蓄銀行のパンフレットに大財川

柳なるものがあり、天位入賞者に
小寺鳩画伯の色紙進呈というプ

レゼントはしさに投句したものデ
すが、一度も色紙にありつけませ

んでした。

その後松坂屋が新築され、路郎
師の川柳教室が開講されて居まし

たが、行かせて頂くチャンスをし
ました。

又、八幡筋の八幡社での句会も
覗かせて頂きに行つたのですが、

何んせ路郎師のハの字罷が恐わく
てとうとう川雑句会に行かぬ終い

でした。しかし、北みきを、竹中
アキラ、種元一郎といった若手の

作家とは仲よしで川柳やるなら路
郎師にと心して居ました。

戦争中は防空演習に追われ、陸軍で帰えられた私は今度は海軍補充兵の第一回応召兵になり出発終戦後まで艦船勤務をやりましたので川柳の方はストップしてしまっていました。

戦後、大阪駅前の自由市場で露天商をやりましたが、悪質なプロカーに引っかけたり元も子もなくし、その上寒む雨にあてられて、そうでなくとも弱い私は体を痛めてしまいました。

大阪をオサラバしたのはこの時です。以後丸五年間闘病生活活質改善をやり、その暇に大阪天牛古本店などで買った大阪ものの古本を愛読しましたが、その間戦前の「川柳雑誌」の綴ったのを古本屋で見付けて居たのを一生懸命開いて見て勉強しました。

縁というものは恐ろしいもので、健康を回復した私が補充員として入れて頂いた会社小西無鬼先生が居られ、そのお弟子に家沢齊花氏が居られ、無鬼先生の手で川柳雑誌が支那で開かれて居り、齊花氏定年の空席を私が追って就職しました。

こうして長年の私の夢が遂になえられたのは昭和廿六年の四月でした。同年四月より今日まで投句を続けて居ます。

川柳のお蔭で無学文盲の私はコンプレックスというものを感ぜません。

私も一芸を研みわたる者としてのプライドを持ち、貧しい生活に、常に希望と笑いを失っては居ません。身体改善というような馬鹿げた体操をやり通したのも、人間陶冶の詩川柳に生きる者の反逆的な行為であり、人が笑おうとやり抜いた意志の根源には、

頑として牛はゆっくり用を足し

の頑固さを持つて居るが為であったと思つて居ます。

私はかような変り者ですが、ちょっと見れば変人に見えないように、支部を預らせて頂いて居ますが、作句一点張りの方が性に合つて居ます。

他柳誌は一切見て居ないので、独善的な句が多いのと、貧相な庶民の声より出ない大きな欠点を何とか是正したいものと考えて居ます。

十二貫柳に風とくらして来

五十の

手習い



河相すゝむ

川柳なるものを初めて知ったのは明治生まれの私には御多聞にもれず漫画川柳からである。大正から昭和にかけての雑誌の素文、対

岳坊、しげを、青起、千帆諸家画くところのそれであり、川柳家としては井上剣花坊氏を覚えていて程度で、句よりも漫画からの印象に過ぎなかった。むしろ当時は藤村や啄木にひかれその真似事に憂き身をやつたものであった。校友会誌にも関係したが、詩、短歌俳句はあっても川柳は全然なかった。と云うよりは文芸として扱ってはいなかった。社会人になっても俳句には多少親しんだが川柳には無縁のままに過ぎて来た。

川柳をほんとうに知ったのは、戦後子会社のある貧乏会社を引き受けさせられて、もともと技術畑育ちの自分に不慣れな経営の過労から、一年余の入院生活を余儀なくされた時からである。たまたまその明和病院には元川柳雑誌社の水谷鮎美氏の指導で古くから川柳会があり、小浜牧人さんを中心に満秋、蕨風子、弦月、舟遊等の今の明和研究会の連中が熱心に作句していた当時であり、阪大の「大川端」の同人である西尾青一路事務長を迎えて益々盛んになり恵まれた環境に在った。こんな或る日ふと「川柳雑誌」を手にして、今までの認識とはあまりにも違う川柳に驚かされた。昭和三十一年の秋の事である。

俺に似よ俺に似るなと子を思ひ

古くとも僕には仁義礼智信

を知るに及んでこれなる哉の感動に自分もやって見たくなり、すめられるままに忘年句会に十七字を投句したのが作句の始まりだった。その後句集「大川端」「美をぶらす」を貸り、路郎先生の「旅人」を読むに至って、そのすばらしさに全く魅せられてしまった。

さけとろり大空のころか

君雲を話す心になり給へ

鮎美

あの漫画川柳からこまでの中と云うか飛躍する川柳とは一体何者であろうか、どうして生まれたのであろうか？作句を前に先ず川柳の生い立ちを知りたい念に馳らされたが、誰も答えてくれるものがない。入院中ではあるし意にまかせない。やっと入手したのが路郎先生著の「川柳とは何か」である。むさぼるように読破した。二説、三説益々川柳への魅力が深まって、入院生活の私には川柳が無二の伴侶となり、離れ難いものとなつてしまった。

その後「柳多留」の占める位置、各柳社の事、その機関誌、各地に句会があり、限られた人達によつてではあるが全国的に同好の士があること等も知った。

そのうちに病院の句会も新たに不朽副理事長の西尾葉先生と云う得難い指導者を得て、一時は会員九十余名にも及び三十二年三月

には川柳雑誌社明和病院支部になり、自分も曲りなりにも柳界の一員に加えられた。入院中の抑圧からの反動か、退院後はマニヤと笑われる程大阪、神戸の句会をのそき歩き、柳書漁りを続けて、未だに作ることもより知ること夢中で今日に及んでいる。

文字通りの五十の手習いである。終戦、発病が川柳に結びつく動機であり、「川柳雑誌」麻生路郎先生によって川柳へ開眼させて戴き葉先生によって川柳の道へ入って貰ったことを心から感謝している次第である。

路郎先生の「川柳とは人間及び自然の性情を素材とし、その素材の組合せによる内容を、平語俗語で表言し、人間の肺腑を衝く十七音字中心の人間陶冶の詩である」と云うこの「人間陶冶の詩」こそが川柳のいのちであり、私の体験である。闘病及びその余後だけではなく、川柳はあらゆる場に於ける心の糧として、人生の伴侶であることを信じるものである。しかし乍ら、文芸としての川柳は庶民の詩と云うにはより高度のものであり、愛好者即川柳家ではなく、天分に恵まれた作家として初めて到達するものであると思つて居る。私などは単に一川柳ファンに過ぎず、唯柳界のより隆盛を、その位置の確立を祈つてそれに少しでもお役に立てばと念願するのみである。そして一生、川柳を続けたいと思つて居る。



入門講座

研究題「孤独」

清水白柳

雄峯

繁太郎

清風

周甫

K

孤独という言葉は古い辞典などを見ると「ひとりもの」又は「寡婦」というように出て居ります。現在の感覚から孤独を考えますと大分違つて思われるのであります。それでこの孤独という題によつて作句する場合は矢張り現在の感じによつて作句したいと思ふものであります。フレッシユな感覚、若い知性をくぐつて古い孤独という言葉を生かしてゆきたいのです。

春の夜にふとたかぶりのある孤独

亜矢子

この句は「平安」六月号の中にある句であります。フレッシユな感覚を学びたいと思ひましたのでここに引例として頂きました。

靴磨き孤独青空僕のもの

隆史

夕焼けを見てさへ孤独涙ぐみ
手鏡え雲をうつしている孤

一鶴

雄峯

繁太郎

清風

周甫

K

靴磨きの句は青空僕のものと言ひ切つた点に佳さを感じました。そしてこの孤独には、希望があり温かいものを感じたのです。夕焼けの句は少しセンチに過ぎるようです。そして涙ぐみとまで言つたのは言ひすぎたように思ひました。手鏡えのえはへを使うのでしよう。雲をうつしている女性の心理を描いているのですが少しあまやうです。その上こしらえた句という感じがしています。

宝石と猫女一人のいい暮し

F

扶助料を受けて孤独を世に
拗ねる
見廻して深夜に寡婦の銭を

算む

Y

宝石の句は何かで見たように思ふのだがどうしても思ひ出せない。「二人のいい暮し」で孤独は表現出来るでしょうか。考えて見

たいと思ひました。扶助料の句は女性の孤独だと考えられるのですが、世に拗ねるとは考えた句語です。併し作者が思つてゐる程共感を得られるでしょうか、この句も一度考えて見たい句です。最後の句は孤独な人が頼るものは金の外にないという風刺を詠んで居るのですが真実味がないやうです。それは想像によつて作られた句だと考えるからではないでしようか、想像の句が悪いというわけではありませんが人の心をつかむ力がないからです。

孤独でも脱線転落事故皆無

脱線をして誰に気兼ねのない孤独

前の句は少しふざけたやうな句ですが、自己の心境を告白したという大きなことではないにしても、それに似た真実感がくみとれると思ひました。そう言つた点で面白く思ひました。後の句の誰に気兼ね——の誰には省いた方がよいと思ひます。省くことによつて句の形がすっきりして定型になるからです。

慰めの言葉に孤独つのもり来

る

平面的な描写になつてしまつて

います。つのもり来る孤独感はこの

浅い感じではない筈です。突

つ込みが足らなかつたのでしよう

口下手になるほど水き孤独

にて

佳いと思ひました。それは口下手

になる程という描写がよかつたか

らです時間的な経過を句の半分に

置いた表現方法が成功したのです

沈黙という手で孤独に耐え

て生き

句の素材は良いし表現方法にも

苦心して居られるのはよくわかり

ますが、最後の二字の生きが説明

になつてしまつたやうです。孤独

に耐えるということと生きてゆく

ことは現わされているのですから

別の句語を考えるか思ひ切つて生

置いた表現方法が成功したのです

沈黙という手で孤独に耐え

て生き

句の素材は良いし表現方法にも

苦心して居られるのはよくわかり

ますが、最後の二字の生きが説明

になつてしまつたやうです。孤独

に耐えるということと生きてゆく

ことは現わされているのですから

別の句語を考えるか思ひ切つて生

方を捨ててしまふのも一つの表現

方法ではないかと思ひました。

思う事猫に話して今日終る

話相手に猫をえらんだのは面白

いと思ひます。孤独という何か淋

しいやうな感じのする課題を、ほ

のかな温かさを持った素直な句に

されたのはお手柄でした。

嬉しさを誰に語らん孤独の

身

少し気取りすぎたやうです。誰

に語らん孤独の身などと文字を使

いすぎているのに内容が浅いと言

えます。もつと省略をしてピンと

感じるやうな句にしたいと思ひま

した。

みな言うてしまひ孤独をふ

と感じ

この句の場合の孤独はふつと脳

裡をかすめた孤独感なのでしよ

う。それはふと感じたというふと

という語にあらわされていると言

えます。ふとという語は使い方に

よつて句を殺す場合が多いのです

がこの句の場合は生きてゐると思

います。

つき合つて見れば孤独の人の

この句の孤独という語は浮き上

つてしまつたやうな感じがしま

す。それは、つき合うた人の好い

男が孤独だったやうに少し無理

理があるやうに思ふのです。作者

の実感であつたとしましてもこの

素材では共感を得ることが出来な

いようです。別の観点から句にし

た方が佳い句になると考えられま

す。

キャバレーの騒音孤独感さ

れず

騒音は少し変に感じられます。

音楽が楽団演奏を騒音と作者は感

じたのかも知れませんが、そう言

ひ切つてしまつては句の上にプラ

スにならないやうです。この句の

場合は騒音と言うよりは静かな旁

聞気の方がよかつたのではないで

しやうか。

孤独だと無理に云う娘の胸

豊か

無理に言う娘の、というのは作

者が思つてゐる通りの意味を読む

者に感じさせないやうです。わた

しは孤独なのよ。とか何とか言つ

てゐる娘の描写としては失敗のや

うです。練り直して別の観点から

句にしてはいいと思ひます。

燃ゆる血もあろうに若い尼

僧

若いという説明は要らないと思

ひます。燃ゆる血はその若さを現

わしてゐるのですから若いという

文字を省いて孤独なという語に

したいと思ひます。そうすること

によつて句の形もすつとよくなる

燃ゆる血もあろうに孤独な

る尼僧

とな

とな

とな

とな

とな

とな

とな

とな

とな

とな

とな

とな

とな

とな

とな

とな

とな

とな

とな

とな

とな

とな

とな

とな

とな

とな

とな

とな

とな

とな

とな

とな

とな

とな

とな

るのです。すっきりするようです。

此方がよいと孤独のやせが

まん 杏花

孤独には違いないが、独身の方が句意にピッタリするようです。つまり孤独という言葉の感じ方に相違があると言えるのです。

えり垢に孤独の匂いする着換え 句念坊

えり垢に孤独の匂いとは大へん苦心して考えられたようですが、その苦心が着換えと説明してしまつた為に平凡になってしまひました。惜しい句です。座五六字を考へることによつて佳い句になると思ひます。

孤独者訪えばなかなか帰さない 晃康

句意はよくわかるのですが孤独者と書いてひとりものと読まねばならないようなのは不可です。この孤独にも感覚的な古さがあると思ひます。

孤独感などおまへんと多趣多芸 辰始

作者の実感なのでしょう。併し孤独感などという語は成功しているとは言えないようです。深刻な孤独感ではなくて淋しさ位いの句意ではないかと感じたのです。

チビ靴へ孤独をのせるベレ 和三郎

孤独にびったりした句で、うまく詠まれています。態を言えば描写だけに終っているの深さがほしいというわけですね。

陽の目見た無形文化という孤独 保夫

浮かび上つて来た無形文化財と

いう老人の孤独感を句にまとめたのは佳かつたと思ひます。着想を広げること大切なことではあります。間口だけを広げて奥行きを浅くならないように一句一句をほりきつて行きたいと思ひます。

嘘うまく言えて孤独を噛みしめる 弘明

心理的な句で深さを持っています。孤独を噛みしめるという句語が成功しているの佳句だと思ひました。

御親切解かると孤独煮え切らず 弘村

この句も深いものを持っています。そしてこの孤独感に知性を感じたのです。第三者からみてはがゆいような、煮え切らない態度に、いらだたしさを感ぜさせる孤独性なのです。

孤独ではない御仏の御名をよび 静水

少し古い感じのする孤独感ではあります。仏にすることがよつて安心を求めるといふ切実なものを詠んで居られます。併し死生の境目にあつて仏の名をよぶということに考えないで、老人が何事によつて孤独感からのがれているという穿ちと考へたいと思ひました。

養老院孤独の人にもある笑い 和

賑やかな養老院で皆孤独 Y H

養老院と孤独は切りはなせないもののです。句にまとめる場合は養老院に入つて居られることだけで、すでに孤独な人なのですか

らその上に孤独の人にもとか皆孤独というような説明は無駄な文字になります。考へて作句したいと思ひます。

徳利さえあればと孤独しがふえ Y

平凡な描写でしかありません。しわがふえということ段々年をとつてゆくことを詠まれたのです。が成功して居りません。

やさしき吾娘夫婦へ倍加の孤独感 H

句意はよくわかるのです。やさしくしてくれればくれる程孤独感がつのるというのです。恐らく他家へ嫁がせた娘のやさしさだろうと想像しますが、このことを句にまとめるのは少々難しいことです。充分に心の中で練つて居りますと別の場合句になるものです。この感情を大切に置きましょう。

娘に似てるホームヘルパー 八九寸

待つ孤独 ホームヘルパーという新しい女性のことを詠んで居られます。が、孤独という感じは矢張り古い感じ方です。年令的なものを感じますがこれは仕方ないことだと思ひます。

孤独性意識して友人とまたはぐれ Y

友人とはぐれた孤独性というのはよく判るのですが、意識してという語にポイントがあるとしますと、そこにわざとらしさが感じられるのです。別の句語を考えたいと思ひます。

散歩する孤独に杖を友として 照見

何か物足りなさを感ぜさせる句です。散歩に杖の要るのは余程の老人か、それでなければ病氣上りの人という風に考えられるのです。そうしますとこの孤独はそのどちらなのでしょう。そこにも一つはつきりしない物足りなさがあるのではないのでしょうか。

ベッドの孤独文鳥とたわむれる 一鶴

病床にある作者の実感として見るときに、ごくありふれた平淡な句としか考えられません。それはたくみに組立てられた句だからだと言つては作者に申訳けないがそんな気がしたので。

誰にやる気か孤独タメて居り K

こつこつと貯めて孤独は医者へ捨て 隆史

前の句の孤独は余りにも広い範囲に考えられるので句の焦点がぼやけてしまつています。後の句は医者へ捨てと皮肉つて居るのですが、どうもこうした句はとり上げたくはないのです。

美人画を壁へ孤独の膝を抱き 和三郎

どうやら点に入る句ですが鋭いものを持つていない孤独です。

以上で終ります。まだ二、三考えた句もあったのですが、こうした心理的な句を解明するのは私には苦手なので割愛しました。あしからず御ゆるし願ひたいと思ひます。川柳まつりの席上でみなさんにお目にかかれるのを楽しみにして居ります。いろいろの御批判や御希望をその時にうかがいたいと思ひます。

思つて居ます。

次回 研究題「のこり」残り

発表 七月二十日

宛先 九月号の予定

清水白柳 宛



東奥日報社川柳大会

選者きまる

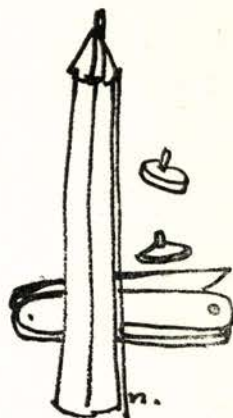
別掲の青森東奥日報社川柳大会の選者がきまつた。路郎主幹が出席されるというので前景気は上々である。

宿題

「告白」 金枝万作選
「ひろさがり」 杉野十佐一選
「穴」 宮本紗光選
「無愛想」 五十嵐さか江選
「うっとり」 中村瞭象選
「自業自得」 中野頑慶選
「見覚え」 岡田稲人選
「初対面」 木村涼人選

席題 選者

西谷みさを・成田我洲・佐藤狂六・小泉紫峰・松尾馬齋諸氏



一路集

欠伸

黒川紫香選

村平とお巡りさんの大あくび
商売繁昌拜んで帰って大あくび
あくびしたのが先生の氣にさわり
あくびしたついでにお尻かいて立ち
節つけるあくびが長いし風呂
競争であくびをしてる倦怠期
つき合いで来てる謡に出るあくび
末席の方からあくびがうつって来
子があくびしたので話やとやめ
連休のあととはあくびが出て困り
ママのおしやべりに根負けをしたあくび
満ちたりたあくび念仏少しませ
送り出し掃除も済んで出るあくび
あくびした眼が職長の眼と出逢い
一人になる社長欠伸も思い切り
馬鹿にしたような欠伸の二度三度

しとやかな女の欠伸下を向き
お見合のあくびが無邪気と逆効果
時計見てあくびしている平社員
生欠伸こらえて妻の愚痴を聞く
順々に出したあくびへ茶がつかれ
猫があくび僕もあくび日が永い
勤務中のあくびへ彼女から電話
ギリギリの時間あくびのままで起き
マーシャンのあくびは妻の愚痴とい
あくびして労組まだまたこれね
終発で着いたあくびをいたわれ
留守番のあくびが隣りまで届き
あくび三つ四つ夜い車の足を切り
カーテンを開ければ向いもするあくび
あくびする子へ先生本読ませ
たしなめたアテレコを寝るとき
終電であくび同士の目が出合い
黒板に向えば先生あくびする
B Gのあくびは貼簿にはさく
麻雀つかれのあくびも午前九時
肩揉む按摩にあくび移される
生まれたあくびしたのも嬉しうて

緊張がゆるんであくびまでもらい
妻の座をしつかりと占めた大欠伸
駐在はあくび平和な日が暮れる
あくびして家計簿の愚痴となり
さし向いもらいあくびを笑い合
あくび出て主治医得意の太鼓判
社長室出てから大きな欠伸をし
あくびにも女心をのぞかせる
披露宴うっかりあくび出て慌て
午後の事務どちらからとなくあくびをし
あくびする奥に入歯ものぞかせる

五客

手の平で隠したあくびが派手になり
観光バスあくびそろそろ伝染し
あくびした子は寝室に追いやられ
かみしめるあくびを客は見て帰り
宿題を教えているのに出るあくび

人

母さんと二人あくびは憚らず
地

倦怠期夫婦向きあい欠伸する
天

子のあくびが母が貰って昼寝する
軸

欠伸してどつちでもよい判をつき
正座して欠伸を殺すのに困り
隅っこ欠伸は席をちとはずし

緊張がゆるんであくびまでもらい
妻の座をしつかりと占めた大欠伸
駐在はあくび平和な日が暮れる
あくびして家計簿の愚痴となり
さし向いもらいあくびを笑い合
あくび出て主治医得意の太鼓判
社長室出てから大きな欠伸をし
あくびにも女心をのぞかせる
披露宴うっかりあくび出て慌て
午後の事務どちらからとなくあくびをし
あくびする奥に入歯ものぞかせる

五客

手の平で隠したあくびが派手になり
観光バスあくびそろそろ伝染し
あくびした子は寝室に追いやられ
かみしめるあくびを客は見て帰り
宿題を教えているのに出るあくび

人

母さんと二人あくびは憚らず
地

倦怠期夫婦向きあい欠伸する
天

子のあくびが母が貰って昼寝する
軸

欠伸してどつちでもよい判をつき
正座して欠伸を殺すのに困り
隅っこ欠伸は席をちとはずし

仮病

那谷光郎選

新婚の当座仮病もうなすかれ
新婦の当座仮病もうなすかれ
仮病ではない飲みすぎの二日酔
お見舞へ今さら仮病とも言えず
仮病して楽しさせても見たい人
金がないから仮病にしているが
宿題が出来ず仮病で子は休み
仮病まで意外課長が知っていた
その仮病同僚達は知っており
最後の線仮病を使つてはぐらかし
あの通り病人ですと眼で知らせ
悪友の電話へわが子病気にし
其手には乗らぬ仮病の脉をとり
予想外の話へ仮病寝て居れず
仮病だと相手にされぬ古女房
マスクして仮病の続き出社する
正直な妻へ仮病を先ずつかい
乾くまでおねしの上で寝る仮病
辻褄を合す仮病に骨がおれ
やりくりへ社長入院難を避け

品質優良

タチカワペン

TACHIKAWA PEN

タチカワビン
タチカワゼム
タチカワ画紙

大坂市東区常盤町一丁目十一番地
立川ペン先株式会社

お大事に仮病と知って受話器おく
 ちくはぐな病状ぶうに欠勤し
 風邪引きがガッチリ錠をかけてい
 仮病とは言えず見舞を貰ったとき
 昼ぬいた仮病へ清焼の香煙う
 逮捕状を尻目に入院してしま
 五日目に仮病でない見舞に米
 米糞が仮病にやたら冷たすぎ
 奥の手が出たと仮病がはつと
 金が要る話四五人風邪で来ず
 仮病と知ってて女医の如才なさ
 つき合いの酒席仮病で早退し
 不渡りとなり仮病もすつとで
 欠勤の届が風邪と決めて置き
 保険屋の仮病見破る勘のよき
 ぱったりと合った仮病もバスに乗り
 急げ癖ちよいと仮病の手を使い
 よく聞けば結局仮病だとわかり
 大げさになって仮病が後悔し
 すわボヤへ仮病が三段飛をする
 母の手は仮病と知らず額へ来
 真夜中に仮病が戸棚探してる
 新妻の仮病は甘える時の顔
 今更に仮病を悔いた腹が空
 仮病してせめて一日寝たい妻
 仮病でもつかえと相談まとい
 挨拶が面倒臭くてする仮病
 仮病とも知らずさわいだ親心
 注射器へ今更仮病だとも言えず
 君もかと課長に仮病見つけられ
 仮病して派手な見合が直ぐ
 又仮病いやがる妻に電話させ
 税務署が来たので父を仮病にし

孝風 信也 青足 不醉 杏花 宗義 弘朗 好女 雄声 古心 美郎 虹要 蛙水 惠二朗 愛鳩 季賛 ひろし 修治 野迷路 文子 圭水 淀月 一鶴

病名を聞かれデートとも言えず
 盲腸をダシに芸者は子をおろし
 お見舞を言われて仮病
 忠三 久軽 素身郎
 仮病ばかり使って素行疑われ
 愛情を仮病で試す不幸
 診断書仮病のように書いてなし
 から咳を電話へもらす風邪の嘘
 失恋を知らず仮病と冷淡に
 頭痛膏べたべた仮病派手にはり
 仮病でも使って見たい事務多忙
 腹痛と頭痛落花の下で待ち
 仮病欠勤思わぬ按摩代が要り
 この次の仮病は妻君かと聞かれ
 子の仮病だにつとめのママ休み
 倦怠期妻は仮病でまた寝込み
 母なればこそ仮病だと見抜いて
 娘の仮病母親思いあたるふし
 軸 句念坊
 天 九呂平 代仕男
 地 九呂平
 人 九呂平
 植木鉢 早川清生選

一鉢はアロエも植えて四十すぎ
 植木鉢葉のにおい知っている
 植木鉢ずらり療養所の主になり
 鉢植に家内は茄子と唐がらし
 植木鉢割っただけの事故で済み
 俗界がきららになつて植木鉢
 植木鉢課長夜店で値切つてい
 植木鉢抱いて離さぬ立話
 いつの間にか妻の荷になり
 植木鉢はめて押し売り荷を
 翠の音を聞いているような福寿草
 盆栽の水に余生がよみ返り
 植木鉢バーの空気は大嫌い
 また枯らすソデツの鉢をさける
 若いものあつさり植木鉢枯れさる
 鉢だけの値だと植木屋負けてくれ
 駅長の趣味改札の植木鉢
 植木鉢置場をかえて茶をすすり
 植木鉢ゆすつて悄然故郷へ去り
 鉢の焼き裏めれば木振り自慢する
 植木鉢理科で習うた芽を植える
 植木鉢花が枯れたら邪魔にされ
 植木鉢に幸福植えている親子
 鉢だけは返せと見頃の菊をくれ
 盆栽の新芽をつんで古稀近し
 緑日で求めた鉢を不安がり
 お隣りへ一鉢あげる花が咲き
 先住の忘れた鉢に芽が出て
 植木鉢並べ直して医者迎え
 じいちゃんの鉢へ小便かけたら
 ゴムの木だそうな床屋の植木鉢
 御主人の個性を植木鉢で読み
 植木鉢値段をきいてやめにする

宗義 保夫 弘道 静枝 孝風 雄々 秀峰 千翁 青足 宗太郎 清風 清風 保夫 宗太郎 晃男 蛙水 清人 藤波 みのる 八九寸 清人 光一 美郎 一峯 初甫 雄峯 旭峯 石峰 虹要 ひろし 生薑 庸佑

植木鉢屋根に残して都落ち
 植木鉢くどくど念を押して出る
 鉢に出た朝顔の芽に子は騒ぎ
 植木鉢物干に並べ街に馴れ
 植木鉢好きで仲人後も好き
 植木鉢なんだかんだと持つてゆ
 植木鉢並べ通動人を喜ばせ
 植木鉢子供は花咲くものを植
 落ちそうなどこにまだある
 花散った鉢へ水やる者がなし
 植木鉢いじって自然の中に生き
 正直に生きてはならぬ植木鉢
 鉢のことこまごま言うて旅に出る
 年金で嫁に値を秘す植木鉢
 色紙短冊
 書画用品
 丹月堂
 大坂戎道
 京都セニシ

雄声 愛鳩 庸佑 生薑 光郎 一鶴 孝風 素身郎 保夫 満秋 博友 涼人 惠二朗

柳一界一展一望



旬会

▼本社主催第九回川柳まつり(麻生路郎誕生日祝賀川柳大会)は七月八日(日)午後一時から四天王寺本坊で開催する。誕生日は十日であるが、地方からの参加に便するため日曜に繰り上げ開催することにしたので地元の人々は云うまでもなく各地からのご参加を歓迎する。▼南区医師会文化部杏林川柳会(大阪市)句会は六月十九日(火)午後七時から三休橋南詰中島小児科診療院楼上で開催。▼南海電鉄川柳会(大阪市)句会は六月二十一日(木)午後六時から難波親和クラブで開催。▼コクヨ川柳会(大阪市)句会は六月二十二日(金)午後五時半から黒田国光堂で開催。▼大阪通信病院川柳句会(土)句会六月二十三日(土)午後二時から五階会議室で開催。▼川維奈良支部創立一周年記念句会(土)句会六月九日(土)午後一時から奈良高校茶道教室で開催。以上路郎主幹出席。▼川維岡山支部句会(土)句会六月九日(土)浜田久米雄居で開催。▼故岡田虎の子句碑建立記念句会(堺市)は七月八日(日)南宗寺本坊で開催。▼富柳会(富田林市)は六

月九日(土)午後六時から故上田勇三追悼句会を同市西方寺で開催。遺族を囲んで故人を偲んだ。

▼前田雀郎三回忌川柳大会は昭和三十七年六月二十四日(日)午前十一時から宇都宮市桜通り「くろがみ荘」で開催。主催は下野川柳会。▼柳誌「はこだて」の昭和三十六年度花童子賞が決定、第一席照井節子第二席木村隆、第三席出村幸司の諸氏が入選された。▼川柳万葉端吟社(ニューヨーク市)創立十周年記念世界川柳誌上大会兼題①世界②心③分れ道④先祖⑤孤独⑥晩婚⑦糸⑧国連⑨ヒント⑩視線、各題二句を課題番号と連記、住所氏名職業年令所屬吟社を明記、投句料百円封入の上昭和三十七年八月三十一日までに熊本市出水町国府二〇八八大島瀨明方世界川柳誌上大会日本連絡事務所宛。▼岩手県川柳大会は六月十七日(日)午前十時から北上市諏訪神社事務所で開催。▼観光川柳七月句会(日)午後一時から伊藤路天居で開催。▼安井八翠十七回忌追悼川柳句会(土)句会六月十七日(日)午後二時半から豊中市曾根萩の寺で開催。▼第四回青森県誌上研究大会(土)句会六月十七日(日)午後二時半から豊中市曾根萩の寺で開催。▼第一部人情・P.R.・タスリ。▼第二部音譜・男・A.B.C.、第三部職・納める・笑い・煙、各題三句

消息

宛を別紙に記載し百円封入の上八月末日迄に青森県下北郡川内町岡田稲人方誌上研究大会係宛。▼第六回全国鉄川柳人連盟大会は七月七日(土)八日(日)日光市の小西旅館で開催、七日は東照宮参観八日午前八時三十分から句会、午後日光観光の後散会。▼広島平和祭川柳大会は八月五日(日)正午から広島市袋町山陽記念館二階ホールで開催、兼題カクテル・寸前・天・親の目・広場・風を呼ぶ・街路樹・傷痕、各題三句、投句は巾三厘長さ十八厘の句箋に一句ずつ明記四十円封入の上前日までに広島市鷹匠町六五広島川柳会宛。

▼路郎主幹は五月二十四日午後四時半から新大阪ホテルで開催されたガガリン氏歓迎レセプションに出席、又、六時から扇町ブルーで開かれたガガリン少佐歓迎関西西大集会にも出席、歓迎の意を表された。尚六月九日には午後五時から大阪府厚生会館で開催のソ連作家観光団歓迎懇談会に出席された。

▼橋本緑雨氏(大阪市)は五月二十七日父母の十三回忌を営むため金沢へ帰省された。

▼若本多久志氏(西宮市)夫妻は六月十一日還暦記念旅行に伊勢志摩国立公園巡遊をされたが、折悪しく雨で雨に纏る志摩の島々は又格別の風情ですとは実に負け惜しみですとの便りを寄せられた。

「伊勢えびにあやかる旅の老夫婦」

▼八木摩太郎氏(堺市)は六月四日から千葉県へ出張、帰途熱海十国峠を見物、東京では雑司が谷墓地の夏目漱石墓碑に参詣された。

▼若本多久志氏(西宮市)は五月二十七日社用で金沢へ出張、久しぶりに青葉の兼六園を散策された。

▼山田季賛氏(高槻市)は六月十一日付で大鉄局の幹線工事に転勤された。

▼山内静水氏(竹原市)は今春令息が短大に進学、四人の子供さん達それぞれ通学して居られるので何かにつけて忙しく、夫婦力を合わせて懸命に奮闘して居られる由。

▼上田紅溪氏(ハワイマカベル)から「川柳ウィロー社加味支部が二月に創立記念句会を開催、以来ささやかな句会を続けています。が、何分始めたばかりで五里霧中です。」と、御発展をお祈りする。

▼河村日満氏(鳥取市)は組合関係の仕事が多忙を極め作句の方はついお留守になってしましますが七月の川柳まつりには投句なりとは是非参加するつもりでいますと。

▼野宮弘氏(大阪市)は五月二十八日から六月三日までの八日間、北西鹿で個展を開催された。



みなさまのお買物センター



心斎橋
そごう
TEL(271)2221

第16回 青森県川柳大会

- ◇日時 7月20日 午前九時半
- ◇場所 青森市民会館 日本間
- ◇宿題 1「雑詠」麻生路郎特別選のほか「告白」「ひるさがり」「初対面」「うっとり」「無愛想」「中年紳士」「自業自得」「見覚え」
- ◇選者 交渉中(各三句)
- ◇席題 1「五題(当日発表)」
- ◇柳話 1「川柳一ト筋に」麻生路郎氏
- ◇呈賞 1一位県知事賞以下十位まで
- ◇投句料 100円 (十円切手も可)
- ◇締め切り 7月20日必着
- ◇あて先 青森市長島三ノ二東奥日報社事業部
- 「青森県川柳大会係」
- ▼工藤甲吉氏(青森市)は六月一日上京、嘔吐・迷夢・拙作の諸氏と上野池の端敷蕎麦で歓談、揃って川柳の墓に参詣された。

不朽洞の人々



交通病院内科医長 北川勝男医師

子供らにや本読め読めと柳誌読む

(春 果)

このごろの子供らには、本を読まぬことが流行のようだ。どんな本でもよい本を読め、というのが私の叱言である。

私自身は、家では医書はいっさい読まぬことにしている。病院での仕事を家に持ち帰らない、というのが私の主義である。家で読むのは川柳誌に限っている。それで子供らには私が大「勉強」しているようには見えないのだ。

▼石曾根民郎氏(松本市)は朝日新聞長野版に、五月一日から毎日「古川柳信濃めぐり」を執筆され、名所旧蹟・伝説・人物・方言・行事・歴史などいろいろとどりの記事を紹介されている。

▼安岡珊枝郎氏(大阪府)は先般突然発病病臥されていたが、この程快癒された由、およびこびり上げ。

▼市場没食子氏(大阪府)は先に淀通信病院薬局長の要職から定年退職されたが、天王寺区堂ヶ芝町明快薬品株式会社管理薬剤師に就職された。

▼米沢晴明氏(大洲市)は六月一日、松山市の伊予銀行本店に、総務部長の月原哲明氏を訪い、久々に柳談に耽けられた由。

▼長谷川三司氏(尼崎市)は神経痛になんていられるが川柳まつりには是非出席するとの寄信があった。

▼榎紫光氏(愛媛県)は五月二十日第八回愛媛川柳研究大会に出席、第一位の成績を挙げられた。

▼浜田久米雄氏(岡山市)は六・七・八月に亘り山陽放送日曜文芸川柳を担当される。

▼津田太楼氏(岡山市)は老齢のため外出がおっくうになりバザリに専念して居られる由。

▼奥谷弘朗氏(倉吉市)は倉吉川柳会の会長大前鳴悦氏の没後淋しくなった会を再建しようと努力していられる。

▼杉本一鶴氏(貝塚市)は病状安定しておられるが服用の新薬の副作用で思考力が衰え作句にことを欠いておられる。川柳まつりに出席して川柳のムードの中で小半日出過ぎたらと云う夢に生きていられる由。

▼山田常葉氏(福岡市)から、最近の福岡は真夏をおもわせる暑い日々を送っていますが、東京とは違って水の方は大丈夫の様ですと六月はじめのお便りに「東京の便りの中へ水の事」

▼松下幽迷庵氏(大阪府)は六月十三日東淀川区山口町崇徳寺で甲賀流忍者のいでたちで来会者へ煎茶を淹れてもてなされた。

▼西田一栄さん(大阪府)は最近心臓障害のため臥しておられるが「まだ医師の手は離れませんがもう大丈夫です。三月に孫が生まれましたはしゃぎ過ぎたのがいけなかったのでしょう。」と。

▼弘津柳慶氏(柳井市)は五月十日所用のため来阪されたが、路郎主幹と面談の折なく帰宅された。

▼河本南牛史氏(松山市)は愛媛県下の結核療養患者の文芸作品集「いよじ」発刊に当り、川柳部門の選を担当された。

▼稲葉鳩花氏(大阪府)は勤務中右手首を機械に巻込まれ骨折、会社を休んで専心治療に当って居られるが、まだ指が動かず、筆記を初め日常生活にも難渋して居られる。

▼田中辰二氏(熊本市)は熊本市清水町亀井岩倉六一八へ転居された。

▼菊田いさむ氏は大阪府三島郡三島町味舌下二八二へ。

慶 弔

▼西田一栄さん(大阪府)は三月一日初孫をもうけれ元久君と命名された。お慶び申上げる。

▼大前鳴悦氏(本名、輝和)(倉吉市)は昨年八月十六日、胸部失患のため倉吉市の垣田病院に入院加療中のところ、突然悪化し、昭和三十七年五月二日午後三時死去された。四十七才。牌名悦学輝秀居士。氏は生前倉吉川柳会の会長として柳誌「打吹」を発行、山陰柳壇に重きをなしていた。川柳不朽洞会々員。謹悼。

▼和田木圭氏(大阪府)は五月十六日午後十時老衰のため死去、年八十一。葬儀は五月二十四日午後三時から天香寺で営まれた。氏はワダカルシウム製薬KKの創設者

▼田中辰二氏(熊本市)は熊本市清水町亀井岩倉六一八へ転居された。

▼菊田いさむ氏は大阪府三島郡三島町味舌下二八二へ。

▼山田季賛氏は高槻市大字高槻一〇五二。八幡荘アパート十二号室へ。

▼村山光輪氏(大阪府)は大阪府住吉区西住之江町三丁目四二へ。

▼本誌五月号三十六頁上段十二句目の句主静子とあるは静水の誤りに付訂正。

▼同号十頁中段、十行目の句、並びに六月号五頁二段目名句と難句の中の句「鬼が笑うことやった教科書タダ」とあるは教科書のタダの誤りに付訂正。

不朽洞会から

★常任理事会―六月一日(金)午後七時から南区三休橋南詰中島小児科診療院楼上で開催、一、川柳まつり実行委員選任及び実行具体策について右案件を協議九時散会した。

出席者は路郎主幹・生々庵・栗・梅里・いわを・恒明・文輝・薫風子・多久志の諸氏と編集局から一三夫・宏子の諸氏。

★常任理事会―六月二十二日(金)午後七時から南区三休橋南詰中島小児科診療院楼上で開催、一、川柳まつりの最終打合せを協議了承、九時散会した。

★新会員紹介

★浅川八郎(富田林市)正
★退会―稲葉鳩花氏(大阪府)、吉本善風氏(尼崎市)は家事の都合で六月限り退会された。(多)



「帳消し」入選発表

麻生路郎選
投句総数 六百十三句
入選 四十五句

二割しかとれず債権放棄とは

素郎

泣けるだけ泣いて帳消しにするつもり
大坂 生々庵

集金に根まけた棒を引き
大坂 喜仙

帳消しにして心地よい湯につかり
大坂 文蝶

貸倒れ金とは大それた名に交り
奈良 仙甫

お手柄を酒が帖消ししてしまひ
岡山 葵丘

一札を入れて帳消し如才なし
大坂 南宗

借りた方だけ帳消しのつもりで居
大坂 晃

貞操を金で棒引きする家裁
笠岡 桃里

帳消しと云うにもそろばんはじいて見
新潟 むじな

新編

なにもかも帳消しにして結婚し
芦屋 一十

大坂 大然

渠鴨へはとりにも行けぬ売りを消し
大坂 大然

大坂 狂二

帳消しになったら取引やめる肚

神戸 静馬

一ぺんの浮気で一生尻に敷き
豊中 夢虹

香典返し寄附しましたとはがきが来
笠岡 遠二

帖消しにするかと痛いところ突かれ
笠岡 真奇

帳消しに女房のコネでして貰い
岡山 十九平

これでもう借りはないぞと念を押
岡山 藤波

留学の恩は養子で差し引く気
大坂 一三夫

帳消しになって女給は店を変え
大坂 清人

帳消しにするかと娘望まれる
大坂 文秋

はなむけに借金証書くれてやり
大坂 阿茶

大坂 柳志

帖消しをした気で刑務所から戻り
大坂 柳志

大坂 恒明

持って死ぬのか帳消しにしてくれ
大坂 恒明

大坂 恒明

前科はきびし帖消しにはならず

西宮 多久志

帖消しのつもり女房と旅に出る

帳消しになるほど利子はもう払い

和歌山 木魚

奥さんが来れば帖消しすると云う

半金がやつの誠意棒を引く

奈良 凡茶

帳消しにするともまたまた借りにく

帳消しにする下心美酒美肴

大坂 梅里

棒引きにする約束で引き抜かれ

帳消しをあてにサービス損になり

大坂 小松園

帳消しのつもりへ届く請求書

帳消しになりまへんと電話口

五客

帳消しになるとも知らず手を握り

BGのキッス帳消ししたつもり

倉敷 方大

帳消しにするには愚痴が言い足ら

おぼしめしあつて帳消ししてしま

大坂 生々庵

帳消しにしてくれそうでない女将

人ノ句

帳消しにしてねと女軽く嘆き

岡山 十九平

帳消しにしたでと賞与袋だけ

大坂 狂二

★大万

コーナー★

投句総数

四月が四七

六句、五月

が五七二句

とはね上が

り六月には

六三三句と

月毎に増加

したことは

珍しいこと

です。本誌

のおかげとよろこんでおります。

昭和三十七年度(六月現在)

大万川柳ベストテン

一 藤波

二 圭水

三 梅里

四 文秋

五 静馬

六 恒明

七 方大

八 柳志

九 十九平

一〇 圭井堂

一一 狂二

一二 晃

一三 遠二

一四 生々庵

一五 恵二朗

大阪・東京 京都・神戸



お買物は
4都を結ぶ
大丸へ!

- 一六 清人 五五 大阪
- 一七 清生 五五 三島郡
- 一八 好郎 五五 泉北
- 一九 良 五五 大阪
- 二〇 桃里 五五 岡

★

次の兼題「エプロン」五句以内

〆切七月十五日

発表七月二十日(大万店内)

〆切八月十五日

発表八月二十日

投句先 大阪市阿倍野区松崎

町三ノ一〇 大万川柳会

川柳雑誌社特製

投句用 柳 箋

一冊(五〇枚綴)三〇円
送料(一冊分)二〇円

沖繩と川柳

服部 十九 平

沖繩に旅した私は沖繩で川柳を探した。歌碑をみては川柳ではないか、新聞の文芸欄に柳壇はないか、放送に川柳はないか、会合で柳人に出くわさないかと、そして送に川柳一つを探し当てることが出来なかった。その失望をせめても救ってくれたのはここに言う一つの挿話である。

ひめ百合の塔でガイド嬢の涙声を語らせての説明にホロリとさせられている私に、同行のK君が「服部さん、ここで東はどの方向に当りましょうか」と言う「この方向ではないですか」「私もそう思うんですが、そうだとすると少しヘンなのです」とK君は不審顔をする。

ひめゆりの塔も東を向いて立ちという川柳を覚えていたが、現地へ来てみると、ひめ百合の塔は東に向いていないではないか、あの川柳は嘘だとK君は言うのだ。

そこで私は、東という意味は日本ということでは必ずしも磁石の示す東ではない、ここから日本は東北に当たっている。いや、これも日本だ。この塔の下にある洞窟において、日本の隆昌と民族の悠久を念じつつ自決した可憐純情な乙女たちは、死んでも日本を念じていることを、ひめゆりの塔も東に向いて立ちと詠ったのだと説明しようかと思つた。併しそれは今、ガイド嬢の説明から受けた感激に溺れたようでもあるので、川柳にはヒクションが許されるよ、とあつさり言おうかとも思つたとき、ふと傍にある小さな石碑が私の目にとまつた。その小さな石碑には、ひめゆりの塔と刻んである。そしてそれは東の方に向いている、私は救われた。

その句は、この小さな石碑当時のひめゆりの塔を詠つたのだと明快至極な返答をして私はK君と共にその小さい石碑にも花を捧げた。ひめゆりの塔は終戦直後この地の村長をしていた金城和信氏が当時の乏しき資材と労力奉仕で、ささやかな石碑を建てたのであるが、その後立派な大理石のひめゆりの塔が出来、また数々の歌碑や供養塔も立ち、ひめゆり平和像、女子学徒石像なども建てられこの地が整備されたのであった。



鳴恍を悼む

去る五月二日午後三時、山陰特有の朝から雨のそぼ降る日。大前鳴恍氏は突然病状が悪化し、四十七才を二期として不帰の客となられた。鳴恍氏は卓越せる指導力と、燃えるような情熱で、昭和三十年三月、倉吉川柳会を設立し、もくもくと地方川柳発展のため努力されてきたが、突然の死を知って各方面から非常に惜しまれて

たまさかの試歩に千四札が消え安静の気もそぞろなる空財布院長のサジうどん粉で眠らされ病院に寝て百円が身にしみるまた愛妻家で知られていた鳴恍氏は夫婦愛の深さを知る句も多かった。

私に鳴恍氏を知ったのは、倉吉川柳会発足の少し前に、昨年他界された三嶋美笑氏を尋ねて来られたときであるが、眼鏡越しのやさしい眼指と、謙虚な言動に對して初対面のときから近親感を覚えた。

あつてなく蚤は女房に押えられ妻の目をまだ迷わせているメニユー

鳴恍氏は十年ほど前から病弱であつたためか、作句にも病氣を詠んだ句が多いようである。借金に苦しむようになって瘡を食ひながら秋の月をほめ

妻の光枝さんとの間に中学と小学校の二人のお子さんがいるが、山陰柳人はお元氣でお暮しになるよう祈っております。合掌。惜しまれて近く日雨雲重くたれ

まもなく柳詠「川柳打吹」を発行されたが、選句・編集・印刷・製本および発送を一手に引き受けられ、その間たえず作句とその研究を進められ、旺盛な柳魂に對して敬服の外はなかつた。三十三年六月、川柳不朽洞会員となり、いよいよ眞価を發揮された。三十四

面会の妻のあれたる手を握るそして川雉六月号に載つた次の二句が絶句となつた。病氣まで撒かれてうれし春の恋ちやはやしてくれたに臥ればそつぽ向き

小西雄々

雄々



いのちある句を創れ

投稿規定
▼用紙は原稿用紙▼文字は正
確▼締切毎月十五日▼投稿先
本社宛

本社 六月旬会 (大阪市)

6月7日 午後6時
会場——千日前自安寺

ことしは男性型梅雨だそうで、それを
実証するように降りも降ったり正に十砂
降り。だが熱心な方々が続々つめてこら
れたのは頭が下がる。

古方氏が九州旅行から川柳人としての
電報を、学校宛に打たれた数々のおもし
ろい柳話をされた。(16ページ参照)

生々庵不朽洞会理事長が、来月に迫っ
た川柳まつりの盛会であるようにと話を
入れられるなど、柳典いよいよ近しであ
る。

路郎主幹は川柳まつりがすむとスグ青
森から東京への旅行に出られるお元氣さ
をしめされた。

六月の不朽洞賞は若本多久志氏が獲得
された。

(F)

出席者―路郎・静馬・文秋・八郎・清
風・いさむ・柳宏子・一瓢・良・あいさ
・繁雄・いわを・白柳・専翁・庸佑・朱
人・好郎・梅里・行人・圭水・判志・圭
井堂・和郎・多久志・正一・水京・舟遊

・薫風子・水客・白溪子・柳志・す・む
種雄・晃・たねお・古方・善風・生々
庵・清人・凡子・阿茶・一三夫・雄声・
進之助・季費・奈良子・宏子・腹乃

兼題「銘柄」 麻生路郎選

看板に負けるな事務所選挙戦 清風
銘柄は町内一と折紙し 句念坊
減配の銘柄持った気の重さ 大然
デパートの初夏銘柄を派手に売り 八九寸
銘柄もチャリ夫人がビールつぐ 真砂
銘柄の久留米の好きは文化財 繁太郎
妻の知恵株を握って冴え始め 文子
値段の方で銘柄などは言うところ 季費
銘柄がどうのこうのと端株買い 柳宏子
銘柄のお育ち妃殿下となられ 一鶴
特急という銘柄を派手に提げ 白柳
三倍にする銘柄を漁り漁り 晃
正銘のスコッチだつと瓶を見せ 静馬
銘柄へ妻の意見も聞く茶の間 す・む
自慢の一つに三越が飛んでくる 雄声
銘柄の強味は株価さがつても 圭水
二級品と知らない酒に酔いつぶれ 多久志
銘柄も知らない酒に酔いつぶれ 和郎
銘柄は変えず機械化されており 圭水
銘柄に詳しく株は持っていない 白溪子
銘柄のよさに偽物つかまされ 柳宏子
気がつけば斜陽銘柄ばかり持ち かねお
銘柄にかかわりもなく好きな株 いわを
銘柄で世間大学出す予算 専翁
七色の灯に銘柄が浮き出され 進之助
老後の糧と銘柄しか抱き 一鶴
銘柄にあぐらをかいて忘れられ 和郎
味しめた銘柄合も語り草 多久志

兼題「アイディア」 清水白柳選

文化住宅よくもアイディア生かしてる 季費
アイディアの若さ社長にたかる 真砂
アイディアのヒットだこちやん今いづこ 野迷路
手洗いで湧くアイディアを笑われる 文子
マネービルアイディアがアイディアにおわり たねお
アイディアが浮んだとたん子が帰る あいき
肝心のこはアイディアばかりしとき 静馬
アイディアを見せ合う腹を張り合い 柳志
社長の座固しアイディア又ヒット 正一
さてやるとなつてアイディア迷いが出 文秋
事故起きたおかげでアイディア浮んで来 圭水
デザイナグッドアイディアアパイル 判志
製品は買わずアイディアはあまるだけ 一十
アイディアは凄いとおつむ見上げられ 生薑
ブラジャーへ男のアイディア入り入れる 阿茶
アイディアの出た失敗を笑い合い 菁風
アイディアへ父の煩悩そりやまずい 八郎
アイディアはとれ会社は追い出され 柳宏子
持ち寄ったアイディアに採るものがなし 良
アイディアにこじつけ車買わされる 菁風
アイディアを買って輪切りにした豆腐 一瓢
アイディアもおぼんは目には通じない 十悟
アイディアどころか棚もよう吊らず 雄声
アイディアどころか棚もよう吊らず 水客
湯呑の円さアイディアを手でかこむ す・む
肝心のところをアイディアぬかつとり 水客
アイディアは善意のなかで食い違い 生々庵
アイディアが不老不死とは恐ろしい 白柳
年令の差がアイディアを不安がかり 晃

兼題「天気予報」 松江梅里選

曇り時々雨とはどつちつかずなり 白柳
星空へ天気予報は雨と言う 阿茶
あきらかに天気予報を聞かず出る いわを
死の灰のことにふて予報なり 一三夫
天気予報聞いてマダムは服にする 和郎
邪魔になる雨具予報のミスデイズ 進之助
天気予報の苦勞は見えてくれず 静馬
三寒の次は四温と来ぬ予報 圭井堂
予報通り来る台風へ釘あわて 文秋
馬鹿にした予報の雨で風を引き 柳志
降られたと天気予報のせいにする す・む
雨天決行それでも予報気にかかり 生薑
ラジオより正確水虫の天気予報 阿茶
天気予報みないにゴキウス気をもませ 一三夫
天気予報にさえずる水ききん 和郎
気象台予報の後に予報立て 行人
予報とは違う結果に馴れきつて 圭水
老船長天気予報をおかしがり 多久志
天気予報聞いて飯場の花かるた 清人
雨おと天気予報をぐらつかせ 静馬
傘持たず出れば予報の通り降る 庸佑
天気予報ただ参考にする程度 多久志
ぼろくそ言うて予報の傘を持ち 雄声
天気予報あてても感謝してくれや 圭水
ひと月の予報馬鹿げた耳で聞き 進之助
人の気も知らず予報は雨と風 どんたく
夕焼けに天気予報はあざけられ 正一
たたみ傘雨になろうがなるまいが 文秋
曇り後晴れの予報へ夫婦いる 水客
天気予報雨ニコヨンの虚ろな目 水客
天気予報すも職あり晴れと言う 朱人
天気予報に背いて濡れている若さ 一三夫
天気予報あしたを生きる人の群れ 朱人
黄道吉日天気予報は雨と言う 梅里

兼題「廢品」 吉田圭井堂選

廃品回収車もドヤも貸すしくみ 生 薑
 廃品の山を抱えた斜陽族 野送路
 捨てもせず使いもならぬ腕時計 大 然
 拾い屋の子らは玩具に事欠かず 八九寸
 ネクタイが何時か寝巻の紐となり 文 子
 スクラップと言ふ鏡のつく巨船 一 鶴
 廃品が草月流で生きている 菁 風
 思い付き夫人廃品まで生かせ 文 秋
 廃品が工夫ひとつでこれも生き 庸 佑
 スクラップの値だと下請け断られ 十 悟
 老骨が廃品処理を担当し たねお
 廃品も上中下と別けて売り 柳 志
 屑買いが気の毒そうに金を出し 逸 名
 廃品と決めたが捨てるには惜しく 多 久 志
 まだ見切りつかずこの底へ入れ 一 瓢
 廃品を捨てるお金の要るミナミ 白 柳
 赤字になつて廃品見直され 和 郎
 リバイバルこの廃品も顔を出し 八 郎
 ボロキレを貰いに帰る新家庭 水 京
 トラックに積むと廃品金になり 清 人
 眼をつけて捨て机上を整理する 古 方
 廃品の捨て場乗れそなカーもあり 専 翁
 おはらいにババがかけあう大掃除 静 馬
 深海に陸奥と長門のスクラップ 進之助
 鍋敷きに二度のつとめをするピース 圭井堂

席題「内 幕」

正本水客選

内幕をかくす改造とは知らず 文 秋
 内幕を知つてだけの生字引 水 京
 首切りが有るぞと早い地獄耳 清 風
 内幕を見たばかりに左遷され 阿 茶
 内幕を社長いちはんあとで知り たねお
 内幕を知らない奴が騒ぎ立て 和 郎
 内幕もさらけて金を借る話 多 久 志
 内幕を知つてるだけにしつと聞き すゝむ

内幕は見抜いた顔で食い下り 柳 志
 内幕をかくす資料をいつも持ち 菁 風
 内幕を知らぬみんなが馬鹿に見え すゝむ
 内幕を聞こうと授ける肚で居り 白 溪 子
 内幕がわかつた頃はつぶれてた すゝむ
 内幕をぶちまけた顔に裏切られ 生々庵
 内幕をのぞいてからは寄り付かず いわを
 秘書のクビから内幕がばれかかり 清 人
 言訳へ隣りの内幕引き出され 白 溪 子
 内幕をはっきりさせて金を出し いわを
 内幕をのぞけば暴力団だった 良
 内幕が判つてからの言葉尻 白 柳
 にぎらせて見たら損な固い秘書 正 一
 花輪かざつて内幕をのぞかせる 水 客

席題「会 費」

真鍋一瓢選

会費まず取つて幹事の抜け目なし すゝむ
 会費だけ飲まねば損が半分あり 多 久 志
 会費だけとれば用事のないお方 晃
 会費だけ出し二男のとこへ行き あいき
 一年分の会費先輩はらわされ 菁 風
 二次会費出どこをママに疑われ 静 馬
 飲むプラン会費の件でゆきつまり 柳 志
 会費だけ飲んだだけではおさまらず たねお
 会費分だけはがめつく飲んでくる 晃
 会費だけ納めて消えたことかばれ 圭井堂
 会費では足りない分を顔でたし 判 志
 紅一点だけは会費もまけてやり 清 人
 PTA暮しと別な会費出し 庸 佑
 そのうちの七八割は飲む会費 薫風子
 特別会費で裏門から入り 雄 声
 半分は負担さす気で飲む会費 進之助
 会費では損ね口で飲みに行き 柳 志
 安過ぎる会費一票頼まれる 圭 水
 会費未納のままで真正面に席をう 進之助

席題「真正面」

金井文秋選

真正面では勝てぬ相手の足をう 朱 人
 還う来た席が社長の真正面 柳 安子
 真正面欠伸ころすに一苦勞 阿 茶
 真正面だけがマイクの声になり 白 溪 子
 アベックをまともに見てゐるのも二人 圭井堂
 観念の自白刑事をまともに見 静 馬
 まともに聞いてりやほはち惚えて来 雄 声
 真正面に座る美人へ目のやりば すゝむ
 純情のすがるひとみは真正面 あいき
 ラッシニアワ突き合ひう鼻の汗 生々庵
 逆手も捌手もしらずすす帰つて来 古 方
 真正面きよう金婚の晴れ衣裳 一三夫
 真正面鼻の高さを見損ない 阿 茶
 吹き降りの傘へ真正面にぶつかり 白 柳
 妥結して真正面に手を握り 圭井堂
 真正面に見られ断り言ひそびれ 水 京
 ライバルの顔と真正面の席になり 薫風子
 まとも衝くその正論をけむたがり 一三夫
 運悪う真正面に見てたのが刑事 清 人
 演壇へまともに嫌な顔がおり 柳 志
 真正面きつて辞表を叩きつけ 柳 安子
 値切られて真正面に見るは強気なり 白 柳
 手まともに生きる奴は阿呆 晃
 やんわりと真正面をうらめ話つけ あいき

37年度全出席者(六月現在)

和男・圭井堂・一三夫・文秋・清風
 ・すゝむ・柳安子・薫風子・庸佑・
 静馬・生々庵・舟遊・梅里・阿茶・
 雄声・いわを・委費・宏子・腹乃

天位受賞者

⑤文秋・生々庵・水客②三司・圭水
 ・好郎・静馬・圭井堂・一瓢①恒明
 ・客選子・一三夫・雄声・庸佑・柳
 志・白柳・阿茶・晃・榮・和郎・梅
 里・多 久 志・進之助・正一

不朽洞賞杯受賞者

圭水・一瓢・圭井堂・静馬・文秋・
 多 久 志

阿倍野支部句会 (大阪市)
 豆秋忌句会 金井文秋報

別居とは名のみ逢いたいとき逢い 梅里
 別居して老人いささか若返り 十 悟
 飯喰いにゆこうかと別居から電話 阿 茶
 別居以後目にもみえてやる気なり 薫風子
 程々にしとくと親切始ており 庸 佑
 親切と云う押売りを持て余し 柳 安子
 親切は親切として請求書 白 柳
 娘三人亡妻の面影更になく 八 郎
 面影は鼻筋通り争えず 小松園
 面影はまだ花につけ雨につけ 水 客

思うまい捨てた故郷だ恋人だ 光道
 ふるさとはうれし歯のない乳母がいる 恵二朗
 弟に母を頼んで出た故郷 葉光
 ふるさとへ呼び捨てに帰つて来 圭井堂
 ふるさは湖底に沈むが出来 季賛
 ふるさと思ひ出されて来た初老 すむ
 ふるさとを口に出せない程に落ち 文蝶
 小豆でも強情な奴は煮え切れず 清風
 立飲みの残った豆は握つて出 清人
 螢売るところから夜店暗くなり 双葉
 日本中螢の光で卒業し 野迷路
 ヤマバレーで飛ぶとは螢も知らなんだ 静馬
 盃がコップになって座が乱れ 山椒坊
 チト足らぬ顔で出て行くコップ酒 文子
 乏しきを憂えず屋台でコップ酒 たねお
 コップ酒馬鹿になり切り生きている 恒明
 指なめてさもうまそうにコップ酒 舟遊
 クツシヨンのない椅子でよしコップ酒 文秋
 コップ酒をそろそろ隣り座をはずし 榮
 傾しやした政治にふれるコップ酒 六竜子
 五目並べのようにせし並べコップ酒 生薑
 自転車のカギも掛けずにコップ酒 一三夫
 コップ酒からのつき合ひまたつき 柳志
 虫喰うた母の形見をまだしまし 若芽
 初恋の形見も持つて嫁にゆき あいき
 世話ばかり焼かせて形見分けにも来 東岸
 忘れ形見まもり女を棒にふる 良
 亡き母の帯でだんだん母に似る 水客
 形見わけ偽筆などとは思ふまし 生々庵

川雑
 淀川支部句会 (大阪市)

木村水瀧報

一泊を夜行に変えて子へ土産 水洞
 都会の灯だけが夜行をたのしませ 孝夫

川雑
 玉造支部句会 (大阪市)

西出一栄報

電報を片手に夜行の人となり 東洋男
 苦心談腹を折つて孫曾孫 三十郎
 苦心して聞いた早耳役立たず 句念坊
 苦心より金のないのが身にこたえ 生薑
 苦心して買った車で人をばね 一鶴
 小食の女將に女中見つけられ 花村

羽ばたいて籠の狭さが淋しそう 珠笑
 狭い中器用に飛んでいる小鳥 清子
 水使い音にカナリや唄い出し 義介
 放鳥の餌を案ずる妻であり 柳宏子
 特価日へ空から主婦を呼ぶマイク 呂人
 アドルン空から春をフッ下げる 六竜子
 やけくそになつても使う金になし 一栄
 荒壁のままで朗か子沢山 正一
 喜びがもうすぐに来る壁を塗り 文秋
 孤独或る日壁に向つてひとりごと 風仙洞
 ままことのカラーライスは壁の土 あいき
 白壁のように化粧した村芝居 寿美司
 板の壁ここに人住む灯が洩れる 六竜子

川雑
 ハワイ支部句会 (ハワイ)

築山快夢起報

アロハシャツ赤が男に似合い 細香
 宿望の優勝盃に男泣き 浅太
 又かいなストの男はシガー喫い 青風
 男って大きなベビーよと姉女房 静紀
 男なら愛め手も居らぬ八頭身 柳葉
 腹案の首屋が男にくれる 笑有
 変る世へ亭主開白影を消し 泉水
 帰化しても譲らぬものに男の座 快夢起

川雑
 京都支部句会 (京都市)

田中鳥雲報

内幕を知って合掌気が咎め 内海
 頼られて男の意地で引けもせず あき坊
 よい度胸流石男と敵もほめ 紅茶
 船奇談記録破った男伊達 周防
 男気は鬼角無い袖ふりたがり 紅溪
 薄情な男を捨てた手もしらず 魔法麗
 鯉轡ババに抱かれた次男坊 萩路
 責任をとると男はいっただけ 須磨子
 政治家の俄造りの愛想よさ カロ女
 男手の奇蹟五人の子が巣立ち 押山
 施しの術なし裏面もつれ合い 暁舟
 御来光下界で見ればただの雲 静杉
 新聞の論戦裏面にふれもせず 平八郎

川雑
 米子支部句会 (米子市)

小西雄々報

黒リボンその自我像のまだな 一窓
 未完成でよし真直に歩きたい 禎一
 又吃る父に逆うまいとする 鳥雀
 吃る兄の小銭がつつく箱の菓子 紫蘭
 第三者には知恵のない死を選び 紅寿
 わたしならこれよとセンスひらかし 生薑
 自家用に買ったことあり大なるま 司郎
 だるまはんのニクタクムで親しまれ 古要
 札押堂の窓いっぱい汚れた子 尚平
 眼にいっぱい涙をためた反抗期 紅鳥
 母の日の母にいっぱい有る用事 和三郎

酔さめて芸者に習うた歌うたり 虞究
 敬老会などと老人臭くさせ 素瓢
 流塵で寝てはおれない決算期 鶴丸

食品と科学

食品と原資材・機械・包装の総合誌

7月号発売中

150円(〒18円)

罐詰特集

衛生管理 検査 官場品質 食品工品 食品食料 講座

- ◇海外ニュース ◇特許ニュース
- ◇意匠ニュース ◇商標ニュース

〔展望台〕主食・罐詰・菓子・飲料・添加物

大阪 北区 5-4
 電話 961-9373

食品と科学社

大阪 6702番

核実験右と左がある限り雄々
宇宙時代人道軌道より外れ一保
お座敷で飲むから税に税がつき一
目的は飲むこと何処でもよい花見詩郎
花の道春斗デモの砂ほこり蛙眠子
人生観説く先輩が左遷され喜夫
鼻唄の機嫌で遅い灯に帰り明甫
PTA酒が話を丸くする怪山
酒の酔い出でから会合らしくなり露峰
座がしらげで取り持ち歌うたい生
酔うてから無理の一つも言いたくまよ
当選へ参謀格が先に泣き節枝
民謡の松が倒れて唄にされ君枝

川維 篠山支部句会 (兵庫県)

酒井ひか平報

こん棒にこづかれて来た米袋可住
大黒も袋の口はぐつとめ枝葉
金魚まさか袋へ入るとは知らずひか平
内容はどうあろうともボチ袋無鬼
梨の木に見事袋の花が咲き弥栄
秘め言がつじの株の向こえ漏れみのる

川維 備前支部句会 (岡山県)

横山一声報

すつとんだ單車をつつむ春がすみ東岸
鏡おいて一枚脱いだ春がすみ久米雄
春がすみ眼鏡のはこりふいて見る一声
恋人が隠れていそうな春がすみ三六
溶けそうなアダムが浮く春がすみ胡風
春がすみ団地のむつきひる春がすみあやめ
春がすみ花が咲こうが咲くまゝ宗義
花の山遠くに見える春がすみ竜泉
母のない子が弁当を手でかくし良子
胃拡張の弁当箱にある重さ秋月
三月の陽射しに袴のあかが浮き美舟

川維 岡山支部句会 (岡山市)

銀行のまえに小さな易者の灯万女

日本晴れ金のないのも出て歩き九坡
日本晴れ会葬釣りの話をし船ん坊
失業の身を持て余す日本晴れ秋月
よこしまな恋はすまい日本晴れ芳月
日本晴れの事にはあき悔み言い宗義
日本晴れ今日の門出を祝福しあやめ
日本晴れ仰ぐ目にくる鯉の赤三平
日本晴れ南の空はキノコ雲喜白
日本晴れのような心をもてといひ一郎
隣りより大きい鯉の日本晴れ鯨虎狼
日本晴れ煎餅蒲団がよくふくれ
日本晴れ富士は霞があるばかり桃里
医者へ行くさえ気持好い日本晴れ東岸
日本晴れ入学許可の通知つき三六
吉報へ大手をあげた日本晴れ佐加恵
日本晴れ屋根へ蒲団をはおり出し博友
表彰を日本晴れの顔で受け哲郎
日本晴れむつきが乾き切って昼久米雄

川維 土佐支部句会 (高知市)

川竹松風報

用心深い男で出世せず勝喜
運転台に成田山の札かかり大柳
初孫の欲し暮しへ産制し寛
蒲柳の身用心しつづつ長生きし利子
愛称は力の呼び名で湧くゴング天花
呼び出しておいで化粧に念を入れ勝子
かきつけを持って守衛が呼びに来る斐山
呼び出しの電話へ女下駄を借り白梅
店員のお世辞に負けて何か買い三郎
店員がお客になれた定休日理恵
店員の口どの柄もよく似合い竹比呂
旧友と云う程でなしうまが合い未送

時計など見ないで私という間俊江
血圧で齢の弱さを片づける健一
ヤスシーンガム噛む口がちよとやみ松風
遺伝その美くしき鼻柱柳翠
広い胸信じて頼りない夫八重子

杏林川柳会 (大阪市)

裏も表もみるも出しのおつき合小石
玄関はさけて裏から受取らせ五十六
平でいて裏の世界で顔がきき阿茶
孫のおしめ裏も表もわが浴衣野迷路
窮すればこんな嘘まで思いつき生々庵
すねかじりろくでめなこと思いつき一哲

南海電鉄川柳会 (大阪市)

辻圭水報

催し物あつて沿線春にする狂二
選挙間近催し物をロハで見せ雄声
催し物架空の魔物往来し宏子
催し物春の訪れ近からん圭水
催し物場末になれば雨が洩り静幸
催し物へ便乗組みの猿廻わし路郎

コクヨ川柳会 (大阪市)

川口理休報

陋屋に御光米とはわざとらし亀心
警察の隣でなげく無警察千義
指名手配常連の顔のつてる留鈍
この便箋誰と誰とを結びやら理休
便箋にめんめんとする気力うせ節
常連の話半分は女将聞き柳波
春うらら電車も脱線したいころはたる
婿殿を先ずうなすかせ真珠売昭一
春の風邪いたわり合せて共稼ぎ瑤巳

富柳会句会 (富田林市)

阿部柳太報

返事だけでも素直のハイチン八郎
相談には乗るが金なら無いといひ尚史
横車押す相談の股火鉢東雲楼
若後家に相談されて家が採め幸吾
電話帳営業不振と書いてなしきは
三分の音が楽しい電話口呂人
声を落してデートらしい電話口川柳堂
拾田で延々とどく赤電話美代
江戸弁で舌噛みそうな電話口勇三
電話さく度に気になる父の年令紅月
主人亦帰るの電話に寝もならずふじ
電話ではとうに着いていると云うとも子
庭の隅名も無き草も春を告げ六竜子
庭に花植えた女房の一七日吉太郎
庭にすねた箒も春の風物詩摩太郎

諫早川柳会

川岡露眼子報

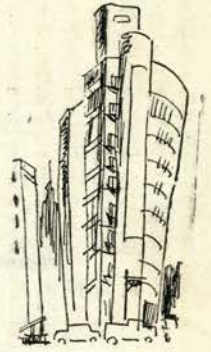
もう悪さするなと刑事それで喰い美寿栄
突風に叱言のようなトタン屋根竜泉
残る花散る花思ふ選良月一呆
かけごとに家喰いたおす白蟻か純香
選挙票真すぐ入れた陽はうらら薫風
ゆきずりの人にも心ゆるる恋露眼子

宴会・出張パーティ・折詰弁当

梅里ノ店

大萬

料亭 阿倍野区松崎町三ノ一〇
TEL(七三)三九三五番
旅館の店 アベノ橋近鉄地下食通街
TEL(七三)〇一四七番
串の店 千日前大劇裏
TEL(三三)二七一〇番



柳 樽 室

路 郎 生

★そろそろ暑くなるが、暑かろうが、寒かろうが、編集局は愛読者諸君のご期待にそうべく前進あるのみだ。

★「六十一まだ情熱は燃えに燃え」と還暦の時にうたった私は古稀は過ぎても、あいつもわらず短詩川柳に情熱を燃やし続けている。老人の熱はそれおそろしいとそしらはそれである。短詩界に骨を埋めることこそ私の終点だと思っている。曾ての私には多くの夢があった。これからの私にも次ぎ次ぎと夢があるだろう。私の夢には私欲はない。

★今年も亦旅ごころが雲の如くに湧く。寒さに弱い私は今がシーズンだ。たまたま青森市の新聞社から招かれたのでりんごの国青森へ行くことになった。(別冊(青森)青森県下の

川柳大会であるから多くの作家に会えるだろう。今の私にはそれが楽しみである。

★帰途には東京に寄る。久しぶりの東京ではあるが別に見たいものも、食べたいものもない。ただ多くの柳友がこの老人を待っている。顔さへ見れば満ちた。七月八日の「川柳まつり」が済んだら、私の旅じたくがはじまり、二十日の朝、特急「白鳥」で出かける。北国路の柳友には車窓から敬意を表することになる。久しぶりに日本海の海の青さに接するのも大きなよろこびだ。

いので、柳誌の減ページや読者の減少があつちこちで行なわれたい。句集なども七人集五人集など刊行されているのもそのあらわれである。その原因の一つに出版物の送費の高いことがあげられる。これは読者が払うものであるからと云うてすまじいではない。地方読者にとっては大変な重荷だ。ひいては日本文化の低下を意味するからである。目下郵政省の机上値上げに従っているわけだから、この方面の出版物に限り特別扱いの運動が起っていいと思っている。★本誌なども、本年に入って二回印刷費の値上げを食った。ガン張ってはいないが、どこまでガン張れるか。ガン張るためには先ず読者の倍増を計る必要がある。よるしくご支援が願いたい。

柳人交換暑中見舞広告を募る

▽ペンの散歩△

▼まつりの季節がきた。川柳まつりも第九回を迎えることになった。生々庵・多久志・梅里諸氏等がモノづくファイトをまやしておられる。★本号もおかげで好読み物がそろった。特に主幹の「窓口談義」は圧巻であろう。

▼「入門の動機」を特

八月号へあなた

の暑中見舞広告を

★一口金二百円。幾

口でも申し込んで

ください。

★一口分の原稿は住

所と姓と雅号程

度。活字指定はお

まかせ願います。

★一口分は五分の一

段組三行。

★原稿締切は七月八

日着便。

★広告料は前金のこ

と(郵券代用でも

よろしい)

川柳雑誌社

集した。こんごもこうした特集をつづけていくが、あくまで読み物である以上、小むずか

しいことはなるべく避けていただきたい。もちろん読んで益あるものであること云うまでもない。(一三六)

七月句会・川柳支部

★淀川句会・5日(木)

六時、題、関係・居眠

り・掃除・所、十三西

之町五丁目東淀川郵便

局。★京都句会16日

(月)夕、題、手水鉢

・濃艶・祭・所、四糸

縄手仲源寺。★明和研

究句会・8日(日)一

時、題、迷い・杵・朝

顔、所、阪神電車鳴尾

駅東南二百米鳴尾公民

館★南海電鉄句会・19

日(木)六時、題、新車

・貧乏ゆすり・下積み

所、難波高架下親和ク

ラブ★阿倍野句会・20

日(金)七時、題、冗

談・手枕・毛虫・強味

所、松崎町三ノ一〇割

京大万★みなと句会・

23日(月)六時、題、

うっかり・肩・結ぶ・

雑詠、所、神戸市電相

生町下車東五〇米高架

下国鉄神戸交電区会議

室。★玉造句会・10日

(火)七時、題、裸・

我慢・宵、所、市電玉

造南一〇〇米大阪信用

金庫玉造支店

風流 人間横丁

B 6型 二五八頁

価250円
送費70円

★異常な戦争にまき込まれ夢手となつて帰還した著者のザック・バランな人生批判が、その雄筆からはとばしるさまは凄く、まるで腕の冴えた坂場の切れ味にも似ている。★本稿は戦後十三年間、「川柳雑誌」に掲載され、好評、サクサクたりしもの補筆した雄編である。後半に川柳に関する卓見もあり、肩の凝らぬ読物としてお薦めしたい。

高鷲亜鈍著

詩川柳考

B 6型函入 定価三百八十円 送費九〇円

★著者は曾て創生期ごろの超現実主義者であつたがその詩論は詩人の民衆的立場を要請した。今では柳界にあって庶民の詩人的自覚を促す。ここに川柳雑誌社が誇る現代川柳批評家として世に送る。凡そ前向作家を自負する柳俳人必読の書

若本多久志著 麻生路郎序

川柳 親ごころ子心

価150円
送費50円

「川柳雑誌」の川柳塔及び近作柳樽の中から親ごころ子心を詠った秀句を多年に亘って根気よく拾い蒐めたのが本書である。★本稿は戦後十三年間、「川柳雑誌」に掲載され、好評、サクサクたりしもの補筆した雄編である。後半に川柳に関する卓見もあり、肩の凝らぬ読物としてお薦めしたい。

大阪市住吉局区内万代西五丁目

発行所

川柳雑誌社

振替口座大阪五五三

麻生路郎著

好評噴々

新川柳鑑賞

川柳の味わい方・五百数十句

(毎日新聞評)

麻生路郎さんは明治三十七年から川柳を手がけているというから川柳歴はもう五十五年にもなる。

この新著は麻生さんが毎月出している「川柳雑誌」に掲載されたものを中心にその他の柳話や句集からひろった五百六十句について、ひとつひとつ丁寧な注釈を加えて、鑑賞の手引に資そうとしたものである。

句の方より実はその鑑賞文の方がなかなかうかがっていて、一気に読ませる魅力がある。

大阪市北区豊田四丁目西番丁二五番地

発行所

川柳雑誌社

電話 大阪 671-7151 東京 550-1500

麻生路郎先生著

川柳とは何か

「川柳の作り方と味わい方」

価 二五〇円
送費 七〇円

川柳はわれわれ庶民の偽らざる声である。絶叫・嘆息・嘆声・嗚咽——そうしたもろもろが十七音に圧搾された風刺と諷刺の短詩型、それは伝統的であると共に常に革新的である。その川柳がいかんして発生し、経過し、今日に至り、将来に動くか、しかもその作り方は、味わい方は——以上を最も明快にわかりやすく、斯界の第一人者たる著者が答えているのが本書である。

取次所 川柳雑誌社

至文堂

東京都新宿区弘方町27 振替東京29507

会長・麻生路郎先生

川柳婦人友の会を募る

川柳雑誌社内 川柳婦人友の会

入会希望者は往復はがきで……

連絡事務所 大阪市南区二ツ井戸町23

山川阿茶

C・M・C 児童音楽サークル

指導 野生アイト

大阪教室内
大教室内
千林教室
奈良教室
あやめ池教室
あびこ教室
生駒教室

大阪市東成区大今里町
北区清本町
奈良市築港池畔
奈良市あやめ池南二丁目
大阪市東区吉田我孫子町
奈良県生駒市

宮本医院
旭清本幼稚園
南山リーナーズ
松浦方
藤村誠造方
文化会館

TEL 970-6321
950-5441
奈良 2-5111
西奈良 5-0377
生駒 2027

★サークルに所属するお母さんには是非、お申し込み下さい。
奈良県生駒市生駒本町三丁目
電話 生駒 2-5111 西奈良 5-0377

Printed in Japan

募集

課題吟募集

つがし値 (十句以内) 正本水客選
P.T.A (十句以内) 石川侃流洞選
料理屋 (十句以内) 橋高薫風子選
飯詰 (十句以内) 松江梅里選
老人 (十句以内) 山根白星選
人 (十句以内) 木村水洞選
(八月十五日締め切)

毎号募集

近作柳樹 (雑誌十句以内) 麻生路郎選
川柳塔 (雑誌十句以内) 北川春葉選
文章 (評論・研究・感想其他) 麻生路郎選
(毎月十五日締め切)

投稿規定

▼ 投稿は各雑誌必ず別紙に認め、住所氏名を明記する事。
▼ 「近作柳樹」は一般作家の雑吟を募る。
▼ 「課題吟」は誰でも投稿が出来る。
▼ 「川柳塔」の投稿は不刊会員に限る。

B列5号 毎月一回一日発行

川柳雑誌 第三十七号

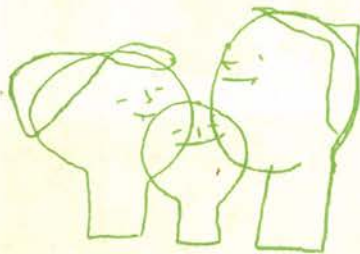
定価 九〇円 (送料六円)

(禁転載)
半力年 五七六円
一力年 一〇八〇円 (半力年五倍)
昭和三十七年 六月廿五日印刷
昭和三十七年 七月一日発行

発行所 川柳雑誌社

大阪市北区豊田四丁目西番丁二五番地
電話 大阪 671-7151 東京 550-1500
郵政口座大阪 七五〇五〇

一家そろつてホーライ党



廣東料理



大阪なんば・TEL (641) 551-2

洋酒の奔騰



万人
その名を知り
万人
その味を賞す

世界の名酒

サントラー

ローヤル 3,000円 オールド 1,600円 角瓶 1,200円

Toray
Reg. Trade Mark



東レ
レインコート

EASYCARE / 手のかからないせんい

東洋レーヨン株式会社

高知／琴平への
最短コース！

(小松島へ525円4時間 琴平へ955円6時間40分
高知へ1095円7時間30分)

なんば発南海ライン

●ゆき

	なんば発	和歌山港発	小松島港発	琴平港発	高知港発
(1)	7 45	9 00	11 40		15 09
(2)	10 30	11 50	14 30	17 30	18 05
(3)	14 10	15 30	18 10		
(4)	17 40	19 00	21 40		

●かえり

	高知発	琴平発	和歌山港発	小松島港発	なんば発
(1)			8 00	10 40	11 57
(2)	7 30		12 10	14 50	16 05
(3)	11 25	12 21	15 00	17 40	18 55
(4)			18 40	21 20	22 35

(641) 8688 0103 9734
(341) 5038 (251) 8117
堺(2) 0678 徳島(2) 2240

南海電車